

日本侵攻前夜のインドネシア知識人のアジア認識

—サヌシ・パネらはその時に
「インドネシア的なるもの」を構想したか—

姫本由美子[†]

Indonesian Intellectuals' Views on Asia in Pre-Pacific War Period:
How they, like Sanusi Pane, Envisioned "Indonesia-ness" in the Dutch East Indies

Yumiko Himemoto

Indonesian intellectuals, represented by Sanusi Pane, a poet, have been regarded as Japanese collaborators during the Japanese occupation because they respected eastern spiritual values. This article aims to examine their views on Asia including their own land, Indonesia, and Japan in the pre-Pacific war era. It also aims to challenge such stereotypical views on their role as collaborators to Japan by analyzing their articles, which appeared in the *Pemandangan* newspapers in 1940 and 1941.

Indonesian intellectuals like Sanusi Pane tried to prevent their country from being involved in imperialistic power struggles instigated by Western, Japanese and even Thai powers in Asia. They attempted to gradually gain concessions for their independence from the colonial government based on their idea of "Indonesia-ness." The "Indonesia-ness" envisioned was a blend of cultures that had been nurtured throughout Indonesia's history of interactions including the Dutch East Indies' period and was to be shared by the people living in the territory of the Dutch East Indies. This vision, formed with consideration to the influences of the natural environment and various Eastern and Western cultures, both inside and outside of the territory on Indonesia's history, was influenced by Rabindranath Tagore, a poet and philosopher of India. Furthermore, they advocated that the new order of the Indonesian society based on this "Indonesia-ness" should be formed by "musyawarat" and "mufakat," Indonesia's historically-fostered democracy. The strategy of the above-mentioned negotiation to achieve the Indonesian independence was also adopted at the early stage of the Japanese occupation in Indonesia.

はじめに

日本占領期インドネシアでの文化活動を考察するうえで、インドネシア人文学者サヌシ・パネ (Sanusi Pane, 1905–1968 年) は避けて通れぬ人物である。

サヌシ・パネは、ジャワの日本占領軍宣伝班が 1942 年 4 月 29 日に創刊したインドネシア語日刊紙『アジア・ラヤ (Asia Raya, 大アジア)』の文化欄の編集長として多くの論考を執筆した。また、宣伝班が 1943 年 4 月 1 日に設立した啓民文化指導所 (Pusat Kebudayaan) の本部長も務めた。さらに、国民図書局と日本語に名称が変更されたバライ・プスタカ (Balai Pustaka) でインドネシア人生徒向け教科書の刊行にも従事した。彼自身も、中学・高校生向けの教科書ではあったが、インドネシ

[†] 早稲田大学アジア太平洋研究センター 特別センター員

アの歴史書をインドネシア人として初めてインドネシア語で執筆し、刊行した¹。

しかしサヌシ・パネを対象とした既存の研究は、日本占領期以前、特に1930年代の彼の活動を対象としたものがほとんどである。詩人・作家として1920年代から30年代にかけて創作した詩や戯曲に関する文学研究や、1930年代後半にインドネシア文化人によってインドネシア文化建設をめぐって戦われた「文化論争」の論客の一人としての彼の思想研究がその主なものである²。インド留学から帰国後の1930年代の活動に焦点があてられ、ジャワ古代史上の英雄をモチーフとした戯曲を執筆したこと、「文化論争」において「インドネシア的なもの (Keindonesiaan)」は古代マジャパヒト王国 (Majapahit, 1293-1527年) やトゥンク・ウマル (Teuku Umar, 1854-1899年) の時代にすでにアダット (adat, 慣習法) や芸術の中に存在していたと主張していたこと、などに対する研究を通して、インドネシア文化に関するサヌシ・パネの考え方が理解されてきた。それらは、サヌシ・パネの特徴として東洋の精神性を重視していたことを強調するものや、インドネシアの栄光を過去に求め、それが植民地化によって暗黒の時代へと一変したと解釈する歴史観を彼が持っていたとするものである。さらに、インドネシアを占領した日本が精神力を重視したことにサヌシ・パネが呼応し、ファシズム日本に協力したとする解釈もある³。また、サヌシ・パネや彼の弟のアルメイン・パネ (Armijn Pane, 1908-1970年) 等の中堅作家を日本軍政の協力者とみなし、当時のインドネシア人若手作家たちが彼らに対して反発を感じていた、という記録や研究も存在する⁴。

¹ “Kokoemin Tosjokjokoe” *Pembangun*, 20 November 2602 [皇紀] (1942). Michael Wood 著 *Official History in Modern Indonesia: New Order Perceptions and Counterview*, Leiden and Boston: Brill, 2005 では、ダウウェス・デッケル (Douwe Dekker, 1879-1950年) がインドネシア史の教科書を1930年代末に初めて執筆し、それが1942年に出版されたとする (Henk Schulte Nordholt, Bambang Purwanto, dan Ratna Saptari edit. *Perspektif Baru Penulisan Sejarah Indonesia*, Jakarta: Yayasan Obor Indonesia, KITLV-Jakarta, dan Pustaka Larasan, 2013, p. 10)。

² 「文化論争」については、以下のような研究等がある。

- ・ Aeusrivongse, Nidhi “Fiction as History: A Study of Pre-War Indonesian Novels (1929-1942)” Ph. D. dissertation, the University of Michigan, 1976.
- ・ 山本春樹 『『インドネシア』の文化論的意味—1930年代の文化論争を通して—』『南方文化』8号, 1981年, pp. 193-207.
- ・ 土屋健治 『インドネシア—思想の系譜』勁草書房, 1994年.

³ サヌシ・パネの文学作品を研究した代表的なものとしては、以下のものがある。

- ・ Jassin, H. B. *Kesusastraan Indonesia Modern Dalam Kritik dan Esei I* (Tjetakan Ke-Empat), Jakarta: P. T. Gunung Agung, 1966.
- ・ Nasution, J. U. *Pudjangga Sanoesi Pane*, Djakarta: P. T. Gunung Agung, 1963.
- ・ Bodden, Michael H. “Utopia and the Shadow of Nationalism: The Plays of Sanoesi Pane 1928-1940” *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 153, no. 3, 1997, Leiden: Brill, pp. 332-355.

サヌシ・パネの歴史観に言及した代表的な研究としては、以下がある。

- ・ Reid, Anthony “The Nationalist Quest for an Indonesian Past” in A. Reid and D. Marr edit. *Perceptions of the Past in Southeast Asia*, Singapore: Published for the Asian Studies Association of Australia by Heineman Educational Books (Asia), 1979, pp. 281-298.
- ・ Mark, Eharh “Indonesian Nationalism and Wartime Asianism: Essays from the ‘Culture Column’ of Greater Asia, 1942” in Sven Saaler and Christopher W. A. Szpilman edit. *Pan-Asianism: A Documentary History Vol. 2: 1920-Present*, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 2011, pp. 233-239.
- ・ Bourchier, David *Illiberal Democracy in Indonesia: The Ideology of the Family State*, London and New York: Routledge, 2015.

⁴ 日本占領期のインドネシア人作家の活動、特に中堅以上と若手作家との対立については、以下の研究や記録等がある。

- ・ Yoesoef, M. “Drama Di Masa Pendudukan Jepang (1942-1945): Sebuah Catatan Tentang Manusia Indonesia di Zaman Perang” *Makara, Sosial Humaniora*, Vol. 14 No. 1, Juli 2010, pp. 11-16.
- ・ Arsip Nasional Indonesia edit. *Di Bawah Pendudukan Jepang: Kenangan Empat Puluh Dua Orang Yang Mengalaminya*, Jakarta: Arsip Nasional Republik Indonesia, 1988. (インドネシア国立文書館編著 (倉沢愛子・北野正徳訳) 『ふたつの紅白旗: インドネシア人が語る日本占領時代』木犀社, 1996年.)

かつて筆者は、サヌシ・パネが『アジア・ラヤ』で発表した論考を分析し、彼が同新聞を利用して、西洋の合理主義の限界に言及し、またそれがもたらしたオランダの帝国主義を批判しながら、同時に日本の帝国主義に対しても隠喩を用いて批判を行っていたことを明らかにした⁵。すなわち、サヌシ・パネが日本軍政への協力をよそおいつつ、実際は日本軍政を利用してインドネシア独立を目指し、そのために欠かせないインドネシアの人々が拠り所とするインドネシア文化について模索していたことを明らかにした。

本稿では、日本軍政期におけるサヌシ・パネの思想や行動に対する理解をさらに深めるために、日本侵攻の直前の1940-41年、さらに1942年3月の日本のジャワ侵攻直後に、サヌシ・パネを中心としたインドネシア知識人がオランダ領東インド（インドネシア）、そして日本を含むアジアをどのように認識していたかを明らかにする。3節からなる本稿の第1節では、帝国主義国同士が勢力争いを繰り返す中でオランダの植民地支配を受けてきたインドネシアにおいて、1930年代後半以降に、西欧列強、特にオランダに対抗するための拠り所としての「インドネシア的なるもの」を、スマトラの少数民族の出自であるサヌシ・パネがどのように考えていたのかを明らかにする。第2節では、1940年代に入り日本の仏印進駐が行われる中で、サヌシ・パネを中心としたインドネシアの知識人たちが日本、そしてアジアをどのように認識していたのかを明らかにする。第3節では、日本によるインドネシア侵攻直後に現地新聞に掲載された彼らの日本観を示す。

以上の分析を通して、主に次の2点を実証できると考える。第1は、日本侵攻前夜のオランダ領東インドにおいて、サヌシ・パネを中心とした文化人たちが、同領域のそれまでの歴史—それは西洋文化の影響を受けてきた事実も含む—に育まれてきた文化を「インドネシア的なるもの」と捉え、それを共有する住民であれば民族の違いを乗り越えて協力し合うべきだと考えていたことである。その「インドネシア的なるもの」を共有した上で土地の伝統に根差した民主主義に基づく新しい社会秩序を備えたインドネシア国家の建設をめざした。第2に、サヌシ・パネを中心としたインドネシア知識人は、当時のアジアにおける国際情勢を西欧列強に加えて日本やタイを含めた帝国主義的な国家間の勢力争いと理解し、その争いに巻き込まれるべきでないと考えた。それよりもオランダ領東インドという領土を歴史的に形成してきた事実も含めて、『インドネシア的なるもの』に影響を及ぼしてきた植民地政庁との協調路線をとることによって、自治、独立へのオランダ側の譲歩を引き出す方が望ましい、と考えていたことである。その究極の目標は、民族、そして人間同士による搾取がないアジア、そして世界を築いていくことであった。したがって、彼らが日本占領期に日本に積極的に協力したとみなすことはできない。以上を実証するにあたって利用した主な資料は、同時期に刊行されたマレー（インドネシア）語日刊紙『プマンダ（ン）ガン（Pemandangan, 展望）』である。なお、サヌシ・パネを中心とした知識人とは、文学者としての彼を中心に、1930年代から日本占領期にかけて彼と行動を共にすることが多かった人々を示し、彼との固定的なつながりによるグループが存在していたわけではない。

⁵ 姫本由美子「日本占領下インドネシアで語られた『大東亜共栄圏文化』の理念：日刊紙『アジア・ラヤ』上の日本徴用文化人と現地作家の論説を中心に」『21世紀海域学の創成—「南洋」から南シナ海・インド洋・太平洋の現代的ビジョンへ』立教大学アジア地域研究所、2015年7月、pp. 145-157。

(<https://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/CAAS/kaiiki/2/55.pdf>)

1. 帝国主義諸国への対抗の拠り所としての「インドネシア的なるもの」:

日本侵攻前夜のサヌシ・パネのインドネシア文化論

サヌシ・パネは1905年、北スマトラのムアラ・シポンギ (Muara Sipongi) でバタック人の中でもイスラームを信仰する部族バタック・マンダイリン (Batak Mandailing) として生を受けた。弟には、やはり作家となったアルメイン・パネがいる。バタック・マンダイリンは西スマトラのミナンカバウ (Minangkabau) 地域と接する北スマトラの最南端に位置する地域に住み、1820年代半ばから30年代半ばにかけてイマム・ボンジョール (Imam Bonjol, 1772-1864年) 率いるパドリ派と反パドリ派の戦争に巻き込まれてイスラームへの信仰を強制され、一部はミナンカバウ地域に強制移住させられて奴隷となった者もいた⁶。それを契機に、マレー半島へと移住した者もいた。このような歴史的背景を持った部族社会に生まれたものの、上層階級出身であったサヌシ・パネは、オランダ語で授業を行う「原住民」向けの小学校 (HIS: Hollands-Inlandese School), ヨーロッパ人向けの小学校 (ELS: Europese Lagere School), そして西スマトラのパダン (Padang) で中学校 (MULO: Meer Uitgebred Lager Onderwijs) の教育を受ける機会に恵まれた。16歳の時に最初の詩をスマトラ青年同盟 (Jong Sumatranen Bond) の機関紙『ヨング・スマトラ (Jong Sumatra)』に発表した早熟な文学少年であった。その後ジャワに移り、バタヴィア (Batavia) の中学校 (MULO) を修了し、1925年にはバタヴィア北西のグヌン・サハリ (Gunung Sahari) 師範学校を卒業した。同年に処女作の叙情散文集『パンチャラン・チンタ (Pancaran Cinta, 愛の光)』を出版する⁷。翌年には、詩集『プспа・メガ (Puspa Mega, 雲の花)』を出版した。同書所収の作品群には、自然を賛美したロマン派詩人イギリスのワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850年) やオランダの新思潮運動を起こした「1880年代グループ」の影響が認められる⁸。師範学校卒業後、エルンスト・アルジュナ (Ernst Arjuna) 学校で教師をする傍ら、インドネシア大学法学部の前身である高等法律学校 (Rechtshogeschool) で哲学を勉強した。さらに母校のグヌン・サハリ師範学校で教鞭をとり、同校の移転にともないバンドン (Bandung) へ転居している。同地では公立の師範学校でも教鞭に立ち、バタック語を教えた。

サヌシ・パネは1929年から30年にかけてインドに滞在し、1913年にノーベル文学賞を受賞したラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore, 1861-1941年) が創設したベンガル地方シャンティニケタン (Santiniketan) のヴィスヴァーバラティ (Visva-Bharati) 大学でヒンドゥー文化等を学ぶ⁹。その経験をもとに、文芸誌『プジャンガ・バル (Pudjanga Baru, 新文人)』の1934年号に「シャンティニケタンの哲学の基礎」と題した論考を寄稿した。インドから帰国後に執筆した詩集『マダ・クラナ (Madah Kelana, 流浪者賛歌)』にはインド文化の影響がみられ、さらにインドネシアの歴史的英雄を題材とした戯曲を数本執筆した。1941年8月7日にタゴールが逝去した時には、同月25日から28日にかけて雑誌『プジャンガ・バル』主催でタゴールの追悼集会が開催され、ムハマッ

⁶ Freidus, Alberta Joy *Sumatran Contributions to the Development of Indonesian Literature: 1920-1942*, Asian Studies Program, University of Hawaii, the University Press of Hawaii, 1977, pp. 10-11.

⁷ *Ibid.*, p. 31.

⁸ Nasution, J. U., *op. cit.*, pp. 29-33.

⁹ Jassin, H. B. "Sanoesi Pane Sintese Timur dan Barat" *op. cit.*, pp. 105-106. サヌシ・パネよりも30年近く前には、日本の岡倉天心 (1862-1913年) とその弟子たちがベンガルを訪問し、タゴールと交流している。

ド・ヤミン (Muhammad Yamin, 1903-1962 年) らとともに追悼文を朗読した¹⁰。

彼のインド留学によって帰着した思想は、1935-1939 年にインドネシア文化人の中で展開された「文化論争」に反映された。それは、1900 年代初頭から動き出した民族主義運動が植民地政府の弾圧を受けて、行きづまりの状況を呈していた時期に、インドネシアの文化的アイデンティティ、すなわちオランダ領東インドが「インドネシア」となるために拠って立つ「インドネシア的なるもの」の探索を試みた論争であった。この論争におけるサヌシ・パネの考えについては、タゴールが彼に与えた影響とともに、のちに触れる。

またサヌシ・パネは、インドネシアの文化的アイデンティティ、すなわち「インドネシア的なるもの」を模索する過程で、政治に対しても強い関心を寄せるようになった。スカルノ (Sukarno, 1901-1970 年) が中心となって結成したインドネシア国民党 (Partai Nasional Indonesia) に 1927 年に入党する。同党は、スカルノが 1929 年に逮捕され 2 年間におよぶ流刑中に、パルティンド (Partindo, インドネシア党) とインドネシア国民教育協会 (Pendidikan Nasional Indonesia) に分裂した。その党員の多くを吸収したパルティンドがインドネシア国民党の方針を受け継いだのに対し、オランダ留学からの帰国組のスタン・シャフリル (Sutan Sjahril, 1909-1966 年) やモハマッド・ハッタ (Mohammad Hatta, 1902-1980 年) が中心となって活動を行ったインドネシア国民教育協会は、パルティンドの大衆運動路線に対して、近代精神の育成に重点をおいたエリート路線をとった。しかし、1933 年 8 月にスカルノが 2 度目の逮捕・流刑となると、前者は 1936 年に解散の道を選び、後者の活動は停滞した。このように民族主義運動が徹底的に弾圧され、オランダ植民地政庁への協調政党のみが存在を許される中で、1935 年 12 月にブディ・ウトモ (Budi Utomo, 至高の英知) やインドネシア人統一協会 (ブディ・ウトモの初代最高指導者らによって 1930 年結成) のジャワの裕福で進歩的な知識人を中心としたパリンドラ (Parindra, 大インドネシア党) が結成された。そこにブタウィ協会 (Kaum Betawi) のモハマッド・フスニ・タムリン (Mohammad Husni Thamrin, 1894-1941 年) も加わり中心的役割を担うこととなる。同党は議会活動を通してインドネシアの自治・繁栄を目指す穏健な協調路線をかかげた¹¹。しかもその穏健な立場は、当時南進の機会をうかがっていた日本に対しても適用され、党幹部の中にはスカルジョ・ウィルノプラノト (Sukardjo Wirnoprano, 1903-1962 年) のように、東洋で唯一近代化に成功した日本の事情を探ろうと同国に滞在した経験がある者もいた¹²。

その穏健路線に対抗して 1937 年に結成されたのが、サヌシ・パネも加わったグリンド (Gerindo, インドネシア人民運動) である。グリンドは、当時の国際情勢を民主主義陣営対ファシズム陣営の対立と捉え、民主主義国家オランダとその植民地であるインドネシアは一致団結して日本を含めたファ

¹⁰ “Memperingati Rabindra Nath Tagore” *Pemandangan*, 27 Augustus 1941.; Redaksi “Memperingati Rabindranath Tagore” *Peodjanga Baroe*, IX No. 3, September 1941, p. 65.; Pane, Sanoesi “Rabindranath Tagore Sebagai Ahli Filsafat” *Ibid.*, pp. 79-83. オランダ領東インドでは、サヌシ・パネだけでなく、キ・ハジャール・デワントロ (Ki Hadjar Dewantara, 1889-1959 年) も民族学校タマン・シスワ (Taman Siswa) を 1923 年に創設するにあたってタゴールの思想に大きな影響を受けたこと、またタゴールによる 1927 年の同校への訪問も含めてその後も彼の影響を強く受けてきたことを記した。土屋健治「ジャワ知識人の西歐認識をめぐる諸問題 (1913 年-1922 年)」『東南アジア研究』15 巻 4 号, 1978 年 3 月, p. 545.

¹¹ 後藤乾一『昭和期日本とインドネシア』勁草書房, 1986 年, pp. 410-414.

¹² “Satoe Setengah Tahoen di Nippon” *Pemandangan*, 27 Mei 1942. 「日本のお正月を偲ぶ」『ジャワ新聞』1943 年 1 月 1 日.

シズムと対決しなければならぬと考え、東インド植民地政庁との協調路線をとった¹³。また、サヌシ・パネはその前年に、グリンドの同志となるアミル・シャリフディン（Amir Sjarifuddin, 1907-1948年）やムハマッド・ヤミンと一緒に、グリンドの機関紙的存在となる華人系マレー語新聞『クバ（ン）グナン（Kebangunan, 覚醒）』を創刊し、編集長に就いた¹⁴。同紙創刊にあたっては華人系マレー語新聞『シヤンポ（Siang Po, 商報）』の協力を得た。

この『クバ（ン）グナン』創刊に中心的にかかわった前述の3名は、皆スマトラ出身者であった。しかもサヌシ・パネはイスラームを信奉するバタック・マンダイリン、そしてアミル・シャリフディンも1928年の第2回インドネシア青年会議において青年バタック同盟の代表を務めたことに示されるように¹⁵、母親がバタック人のイスラーム教徒であった。両者ともバタック人の血を引き、しかもキリスト教徒が多数のバタック人の中では少数派に属するイスラーム教徒であった。ただし、サヌシ・パネがタゴールに関心を持ちインドに留学したのに対し、アミルは、メダン（Medan）でELSを卒業し、10代末にオランダの高校に留学し、そこでキリスト教に改宗している。家庭の事情で2年足らずで東インドに戻り、バタヴィアの高等法律学校で法学士の学位を得た。その時の学友で、やはり法律を勉強していたのがムハマッド・ヤミンであった。

西スマトラ出身のムハマッド・ヤミンは、南スマトラのパレンバン（Palembang）でHISを卒業するが、その後ジャワに移り、ソロ（Solo）の高等学校（AMS: Algemene Middlebare School）でインドネシア古代史や古典文学を学び¹⁶、当時AMSの卒業生の東インドでの唯一の進学先であったバタヴィアの高等法律学校を終了した。1928年の第2回インドネシア青年会議では、そこで採択された「青年の誓い」の草案を執筆し、重要な役割を担った。彼は、サヌシ・パネと同様、スマトラでの少年時代に多くの詩を『ヨング・スマトラ』に寄稿している。またソロ時代の勉学を背景に、インドネシアの古代史の英雄を題材とした戯曲「ケン・アロックとケン・ドウドウス（Ken Alok dan Ken Dedes）」（1934年）などを執筆した。さらにインドの詩人タゴールにも私淑し、文学青年としてサヌシ・パネとの多くの共通点がみられる。

さて『クバ（ン）グナン』を創刊するにあたって、華人系マレー語新聞「シヤンポ」の協力を受けたことは、彼らの華僑に対する考え方を示すこととなるので、その点について言及しておきたい。オランダの植民地であったインドネシアには、1930年代にはバタヴィアだけでもオランダ語、華人系マレー語、マレー語、そしてジャワ語などの言語による約180紙の新聞が存在した。しかし1930年以降の植民地政庁による徹底的な言論弾圧によって、短命に終わる新聞も多かった。言論界にとっては厳しさが増した時期であったが、1858年創刊の「ジャワ・ボーデ（Java-bode）」のような古い歴史を持つオランダ語の新聞も含めて、自由主義的な立場を標榜していた多くの現地ジャーナリストた

¹³ Kahin, George McTurnan *Nationalism and Revolution in Indonesia*, Southeast Program Publications, Ithaca, New York: Southeast Asian Program, Cornell University, 2003, p. 96.

¹⁴ 彼は、1931年にはオランダ語雑誌『ティンブル（Timbul, 出現）』の編集を担当し、そこを拠点に政治や文学に関する発言を行っていた（Nasution, J. U., *op. cit.*, pp. 124-125.）。

¹⁵ 永積昭『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会、1980年、p. 256.

¹⁶ Redaksi KPG (Kepustakaan Populer Gramedia) edit. *Seri Buku Tempo Bapak Bangsa Muhammad Yamin: Penggagas Indonesia yang Dihujat dan Dipuji*, Jakarta: KPG, 2015, pp. 53-54. 同校は、オランダの考古学者でインドネシア古代文化の専門家であったW. F. ストゥテルハイム（W. F. Stutterheim, 1892-1942年）が創設し、アルメイン・パネ、アミル・ハムザ（Amir Hamzah, 1911-1946年）、アフディアット・K・ミハルジャ（Achdiat K. Mihadja, 1911-2010年）などの文学者を輩出した。

ちは、自己検閲の術を身につけて言論弾圧に対抗した¹⁷。

東インドでは、最初にオランダ語新聞が刊行され、その次に1901年創刊の「リポ (Li Po, 理報)」を皮切りとした華人系マレー語新聞が刊行された。華人系マレー語新聞は、20世紀初頭にプラナカン (peranakan, インドネシアで生まれ、平俗マレー語を話することができる華僑) が近代教育を受けるようになったこと、さらに、当時中華ナショナリズムが活発化していたこと、また植民地政庁が彼らに利益をもたらしていた徴税請負制度を廃止したことへの不満が重なって、彼らの間で自分たち自身の新聞を読みたいという欲求が高まり、刊行が始まった¹⁸。その中でも規模の大きなものとしては、『シャンポ』、『シンポ (Sin Po, 新報)』、『シンチットポ (Sin Tit Po, 新直報)』があった。それらの新聞の論調は、1915年に日本が対華21か条を中国の袁世凱に承認させ、さらにその後日中戦争が勃発したため、日本批判を前面に掲げるようになった点ではほぼ一致した。しかし、植民地政庁に対する距離の取り方、1911年の辛亥革命に対する見解、自らのアイデンティティと中国との関係をどのように考えるのか、などの点では立場が異なった。1910年に創刊された『シンポ』は、プラナカンがオランダ植民地制度のもとで特権的地位を得ることをいさぎよしとせず、その制度に組み込まれることを避けて、あくまでも中国籍を取得して中国文化を保持すべきだとの主張を行っていた。その立場は、インドネシア民族主義者の支持を獲得することとなり、両者の交流が進展した。1925年から記者として『シンポ』に雇用されていたスプラトマン (Wage Rudolf Supratman, 1903-1937年) が作詞・作曲し、1928年の第2回インドネシア青年会議でインドネシアの民族歌に採用された「インドネシア・ラヤ (Indonesia Raya)」が最初に活字で発表されたのは同年11月の『シンポ』誌上であった¹⁹。すなわち、同地の華僑はオランダから経済的に特権的な地位を与えられ、一般的には「原住民」の憎悪の対象となっていたが、インドネシアの民族主義運動に共感する華人系マレー語新聞も存在した。

『シャンポ』は、1911年の辛亥革命には反対で、オランダ植民地政庁の臣民となることを主張した右派系の新聞であった。ただし、ポア・リョン・ギ (Phoa Liong Gie) が編集長を務めていた1930年代半ばには、インドネシア民族主義者に共感する論陣を張り²⁰、しかものちに『シンチットポ』の編集長を務めることになるリム・クン・ヒアン (Liem Koen Hiang) が実質上の編集長として多数の左寄りの論考を執筆し、インドネシア民族主義運動に共感する立場をとっていた。したがって、『シャンポ』がアミル・シャリフディンやサヌシ・パネの協力要請を受けたことは驚くに値しない。一方、サヌシ・パネらの『シャンポ』への協力要請は、彼らがインドネシアの民族主義運動への共感者であれば人種の異なる華僑なども協力をいとわない立場にあったことの証左といえよう²¹。

また、こうしたサヌシ・パネたちの考えは、彼らが中心となって旧パルティインド左派をまとめて

¹⁷ 山本信人「インドネシアのナショナリズム—ムラユ語・出版市場・政治」(池端雪浦編『植民地抵抗運動とナショナリズムの展開—19世紀末～1930年代』岩波講座 東南アジア史 第8巻, 2002年, pp. 169-174.); Smith, Edward C. *Sejarah Pengreidelan Pers di Indonesia*, Jakarta: Grafiti Pers, 1983, pp. 68-69.

¹⁸ 山本信人, 同論文, pp. 165-166.

¹⁹ Suryadinata, Leo *The Pre-World War II Peranakan Chinese Press of Java: A Preliminary Survey*, Athens, Ohio: Ohio University Center for International Studies, Southeast Asia Program, 1971, p. 21.

²⁰ *Ibid.*, pp. 18-19.

²¹ 同党は、インドネシアの人々が平等の権利と責任を享受できるインドネシア国家となるまで、同地の経済、社会、政治的發展を推進することを党の目標に掲げた。*Ibid.*, p. 25.

1937年5月24日に設立したグリンドが別の文脈で行った主張でも確認できる。前述したように、グリンドは西欧の社会主義運動をモデルとしてオランダ領東インドの政治的・社会的・経済的な自立を目標として完全な議会を要求した。また、その指導的立場となったアミル・シャリフディンは、コミンテルンがモスクワにおける第7回大会で反ファシズム路線をとった影響も受けて、当時の国際情勢を民主主義対ファシズムの対決の時代と規定した。日中戦争における日本の行為をもファシズムの発露と捉え、オランダ領東インドをファシズムから守るために、オランダとの協調路線を選択し、さらに東インドの華僑との提携も視野に入れた²²。アミル・シャリフディンは、ナショナリティとは、血、皮膚の色、顔かたちによって決まるものではなく、共通の目標、運命、理想を分かちあえることによって決まるものである、と述べて反ファシズムの立場で東インド在住の異なる人種間の協調を訴えた²³。

サヌシ・パネは、『クバ（ン）グナン』創刊やグリンド入党などにおいてアミル・シャリフディンと歩調を同じくした。しかし、彼がわざわざインドまで留学して教を乞うたタゴールは、朝鮮を植民地化しさらに中国への侵略を行っている日本を帝国主義国と認識して批判すると同様に、植民地インドを手放そうとしないイギリス帝国主義を糾弾する立場を堅持していた²⁴。タゴールに学んだ経験のあるサヌシ・パネは、第2節で明らかにするように、グリンドが国際情勢を民主主義対ファシズムの間の対決と認識し、ファシズムと戦うことを理由にオランダとの協調路線を選択したことには必ずしも同調していなかった。それよりも、彼が最初に入党したインドネシア国民党の中心人物であり、また日本占領期にインドネシア芸術センターの設立を計画するなどの文化活動を行ったときに後ろ盾となったスカルノとの密接な関係に鑑みると、よりスカルノの考えに近かったと思われる。

そこで、サヌシ・パネについて考察するまえに、スカルノの1930年代から40年代初めにかけての国際情勢に対する認識を2つの観点から押さえておきたい。

第1の観点は、グリンドによって民主主義対ファシズムとして規定された当時の国際情勢についての認識である。スカルノは、1930年代に入ると、近い将来欧米の帝国主義国間の巨大な戦争が起こると予測していた。その帝国主義諸国に立ち向かい、また帝国主義国同士の戦いにおいて、インドネシアの人民も含めたアジア諸民族の連帯の重要性を説いた。しかし、アジアに位置しながらも邪悪な帝国主義の仲間入りをした日本はその戦争の当事者となり、太平洋の自由と安寧を脅かす存在となる²⁵、すなわちその連帯するアジア諸民族の中に含まれない²⁶、と論じた。さらに第2次世界大戦への日本の参戦が間近となった1940年代に入ると、その帝国主義国間の戦争については、それが資源獲得の戦いであり、ファシズム対民主主義というイデオロギーの争いではないとスカルノは分析した²⁷。

第2の観点は、西欧の近代合理主義に対する認識である。「西欧の没落」と題した論文では、シュ

²² 後藤乾一、前掲書、pp. 430-432.

²³ 同書、p. 442.

²⁴ タゴール、ラビンドラナート（高良とみ訳）「東洋文化と日本の使命」『タゴール著作集 第8巻 人生論・社会論集』第三文明社、1981年、pp. 489-500。1929年6月7日、日印協会での講演。

²⁵ カナヘレ、ジョージ S.（後藤乾一、近藤正臣、白石愛子訳）『日本軍政とインドネシア独立』鳳出版、1977年、pp. 15-16.

²⁶ 後藤乾一、前掲書、p. 346.

²⁷ 土屋健治「スカルノの第二次世界大戦論」『東南アジア研究』10巻2号、1972年9月、p. 235.

ペングラ（Oswald Schpenglar, 1880-1936年）の『西欧の没落』を紹介し、プロレタリアートの大量発生とともに経済的平等の保証は困難となり、19世紀の産物である議会制民主主義は機能不全に陥っている、すなわち西欧は現在「病んでいる」との歴史認識を披露した。そして、独占段階に入った資本主義の体制的表現がファシズムであり、それは当然反民主主義の精神であると批判した。西欧の近代精神、民主主義は限界を呈しているのであるから、インドネシア建国にあたってのモデルとはなりえないと認識していたといえる。そして、インドネシアが拠って立つべきインドネシア精神とは、アダット（adat, 慣習法）、およびジャワ村落の合議に見られるムシャワラ（musjawarat）と全員の一致を原則とするムファカット（mufakat）である、との考えに到達した²⁸。この伝統的村落に息づく合議および全員一致の原則は、破綻をきたしている西欧型民主主義にとって代わるインドネシア社会に培われてきたインドネシア独自の民主主義として提示された。またアダットは、オランダの法学者ファン・ファレンホーフェン（C. van Vollenhoven, 1874-1933年）によって体系化されたことによって、西洋の法律体系とは異なり、地域によって差異はあるが祖先崇拝などの信仰に共通性がみられるインドネシア独自の法体系として認識されるようになった。そのアダットをスカルノは「インドネシア精神」を体現するものと位置付けた。

この2つの観点に関して、先に触れたようにタゴールの影響を受けていたサヌシ・パネはどのように考えていたのであろうか。第1の観点、当時の国際情勢については次節で詳しく扱うこととし、本節では西洋の近代精神と「インドネシア精神」、すなわち「インドネシア的なるもの」についての彼の見解を明らかにしたい。それに先立ち、サヌシ・パネとスカルノには、次の3点に起因した見解の相違が認められることを指摘しておきたい。

第1は、1930年代から日本侵攻の1942年初めまで流刑地にあったスカルノは現実の政治活動の外にあったことである。政治の外にあったことが、スカルノにオランダ植民地支配の全否定と、それに基づいたインドネシア独立のための統一原理を探し求める環境と時間を提供した²⁹。その結果、インドネシアの栄光の過去を悲惨な現在に貶めたのはオランダ帝国主義であり、その打倒によってのみ「インドネシア精神」に基づいたインドネシアの輝かしい未来が実現される、と主張した³⁰。一方、サヌシ・パネは植民地政庁が民族主義運動に対する強硬な弾圧を行い、パリンドラやグリンドといった政庁への協調を選択した政党だけが存在を許された政治状況の只中にいた。それらの政党は目標を独立から自治獲得へと転換せざるを得ず、したがってサヌシ・パネもオランダとの協調路線によって東インドの自治獲得を目指す現実的な選択を行わざるを得なかった。

第2は、スカルノが東インドの「原住民」のマジョリティであるジャワ人であったのに対し、サヌシ・パネはスマトラの少数民族の出身であった点である。そのために、東インドの置かれている民族構成の現状に、より敏感であったと考えられる。彼は、インドネシア民族主義運動に共感を抱いて協力する立場をとる人々であれば、華僑や欧亜混血児（インドー）などだけでなく、植民地支配者側にある東インド在住のオランダ人であっても、目指すべき東インドの自治への彼らの参画を排除しようとは考えなかった。

²⁸ 同論文, p. 239.

²⁹ スカルノは1942年7月初旬、日本軍によって流刑地のブンクル（Bengkulu）からジャワに戻された。

³⁰ 土屋健治「スカルノの研究—パンチャ・シラ成立の過程—」『東南アジア研究』8巻4号, 1971年3月, p. 157.

第3に、これは第1の視点に対して逆説的ではあるが、スカルノが民族主義運動の背骨となる「インドネシア精神」を政治的に考察したのに対し、政治活動家である以前に本来文学者であったサヌシ・パネは、より文化・芸術の観点から「インドネシア的なるもの」を考察したといえよう。スカルノが反オランダ植民地闘争を全面に打ち出したのに対して、青年時代にヨーロッパ文学の影響を受け、西洋から生まれた「芸術のための芸術」の概念を否定したことはなかった³¹。それが、オランダへの対抗軸として据えた彼の考える「インドネシア的なるもの」へ影響を与えたといえるのではないか。

そこで、サヌシ・パネが西欧の近代精神、そしてインドネシアの統一の拠り所となる「インドネシア的なるもの」をどのように考えていたのかを考察したい。その第一の手掛かりは、1935-1939年にインドネシア文化人の間で展開された「文化論争」でのサヌシ・パネの主張である。「文化論争」については、本稿冒頭の脚注で示したようにすでに多くの研究がなされている。したがって本節では、サヌシ・パネの「インドネシア的なるもの」についての主張の概要を示すにとどめる。その上で、既存の研究では扱われてこなかった彼のインドネシア語—それは1928年の青年の誓いで祖国、民族とやらんでインドネシア統一のための重要な要素として取り上げられた—に対する見解を考察する。それを踏まえて、オランダが自治承認を要求するインドネシア民族主義運動へ歩み寄る気配を見せず、一方1940年代に入り第2次世界大戦への日本の参入が間近に迫った中で、サヌシ・パネが東インドの自治獲得のために同領域を文化的にどのようにまとめていこうとしていたのか、彼の考えを明らかにしたい。

「文化論争」におけるサヌシ・パネの主張の特徴の一つは、現在は過去の時代の継続の上にあると考えていたことである³²。論敵であった作家スタン・タクディル・アリシャバナ (Sutan Takdir Alisjahbana, 1908-1994年) は、19世紀末を境として前インドネシア時代とそれ以降のインドネシア時代の非連続性を強調し、前インドネシアの時代には「インドネシア精神」はまだ存在しなかったと主張した。それに対しサヌシ・パネは、その当時すでに「インドネシア的なるもの」は、アダットや芸術の中に存在していたが、それが立ち現れていなかったため、自分たちは同じ民族であることには気づいていなかったと主張した³³。アダットについては、前述のとおりスカルノが「インドネシア精神」として取り上げたように、サヌシ・パネも積極的に評価した。

さらに、文学者であったサヌシ・パネは、「インドネシア精神」を芸術家としての自分自身の体験により引き付けて考えることができた。「文化論争」におけるサヌシ・パネの論考ではインドネシア芸術についての詳しい説明は行われなかったが、彼は「芸術のための芸術」は西洋文化が生み出したものであると記した³⁴。この「芸術のための芸術」は、美しいものを美しいと感じる、洋の東西を問わず人間なら誰しも持つ普遍的な感情を表現することが芸術であると考え、教育的、道徳的主張を込めた「社会のための芸術」との対比で用いられることが多い。青年期にヨーロッパの文学の影響を受け、「芸術のための芸術」の立場で自然の美しさをめぐる多くの詩を創作したサヌシ・パネは、西洋

³¹ Pane, Sanoesi “Persatoean Indonesia” *Poedjangga Baroe*, III No. 3, 1935, p. 90.

³² *Ibid.*, p. 89.

³³ *Ibid.*, p. 90.

³⁴ *Ibid.*, p. 91.

の芸術を否定する立場はとらなかった。

その一方で、サヌシ・パネは、西洋文化が内包する限界も認識していた。彼の考えによると、「西洋では人々が自分たちを守るために自然を征服しようとし、その思考様式によって権力志向が生まれた。そこから肉体を最重視する物質主義、理性を完全無欠なものとする主知主義、そして自分自身を最優先する個人主義が生まれた。これらの上に西洋文化は発展し、工業や商業が発展し、近代帝国主義が生まれた」³⁵、というのである。それに対して東洋の文化については、自ら滞在経験があり、東西文化の融合を提唱したタゴールから多くを学んだ地インドを引き合いに出して説明する。インドでは、人間は周囲の自然環境と一体であり、自然から身を守るためにそれを征服する方法を探す必要性はないとされ、人間の精神性が重視されている、と説明した。

以上の思索経路をたどってサヌシ・パネは、人間とは肉体と精神の両方から成り立っているのだから、西洋と東洋を線引きして考えるのではなく、西洋の特徴である物質主義、主知主義、個人主義と、東洋の特徴である精神主義、感性そして集団性を融合させて完全無欠の文化を創り出すべきである、と考えた。この肉体（西洋）と精神（東洋）との統合の重要性を主張するにあたってサヌシ・パネは、タゴールの「現代とは、東洋と西洋各々が独自に歴史を形成してきた後に再会を果たすときであり、その両者の文化の統合が実現するときである」との言葉を引用している³⁶。彼はさらに、東洋と西洋どちらかがより上にあるのではなく、両者とも同じように不完全な存在であり、実際両者に大きな違いはないかもしれない、と記した³⁷。

そして、「大インドネシアは、歴史とともに進歩してきた『インドネシア的なるもの』の果実のなかから現在そして将来にふさわしい最良で最も豊かな要素を摘み集めて、さらに西洋文化の最良のものを取り入れることによって、よりそれを広げたものを基礎として築かれるべきである」と主張した。インドネシアはあくまでも歴史の中で培われてきた「インドネシア的なるもの」によって成り立つのであり、その「インドネシア的なるもの」は西洋文化の摂取によって広がりこそすれ、変質するものではないことを強調した³⁸。

サヌシ・パネは、「文化論争」での彼の主張内容を、現実社会の文化そして政治分野の活動でより洗練されたものとしていった。1941年に入ると、「インドネシア的なるもの」とは所与のものという性質よりも、それがインドネシアの内外との交流に触発されて変化する点を強調するようになる。それは、1941年に逝去したタゴールへの追悼文の中で語られた。すなわち、タゴールは西洋に触発されて、「バガヴァッド・ギタ (Bhagavad-Gita)」に代表されるインドの古典精神に対して、現世における人間の生きる意味を見出す新解釈を行った、と説明した。そしてインドネシアについても、その点は同様であるとした。しかし、タゴールが元の古典精神を忘れなかったように、インドネシアもインドネシアの心と精神を保持していき、インド思想の影響を受けたインドネシアが「大インド」に飲

³⁵ *Ibid.*, p. 90.

³⁶ Pane, Sanoesi "Dasar Filsafat Shantiniketan" *Poedjangga Baroe*, II, 1934-1935, p. 320.; Tagore, Rabindranath "The Nobel Prize Acceptance Speech" in Sisir Kumar Das edit. *The English Writing of Rabindranath Tagore: A Miscellany*, Vol. III, New Delhi: Sahitya Akademi, 1996, p. 963.

³⁷ Pane, Sanoesi "Tjataan" *Poedjangga Baroe*, III No. 3, 1935, p. 94.

³⁸ Pane, Sanoesi "Persatoean Indonesia" *op. cit.*, p. 91, p. 94.

み込まれることはない、とも主張した³⁹。

この考えは、『プマンダ（ン）ガン』紙に1941年11月11日から4日間にわたってサヌシ・パネが執筆した論考「インドネシア語」に記された次のような彼のインドネシア語観に示されている。

サヌシ・パネは、「言語とは自然環境と人間活動の所産である⁴⁰」と説明する。そして、

インドネシア語も社会や政治、宗教や知識・思想が生み出す時代精神が変化するにしたがって変化してきたのだ⁴¹。

と主張した。すなわちインドネシア語は、インドネシア社会の歴史過程で、その社会が外界と、そして社会の内部で接触、交流することによってそれら外界や内部の様々な社会の言葉の影響を受けて形成されてきたことを強調する。外界と交流することによって、サンスクリット語、アラビア語、オランダ語や英語の影響を受けてきたこと、そして社会内部においてもミナンカバウ語やジャワ語⁴²などの地方語の影響を受けてきた事実を指摘する。そして、インドネシア語はインドネシアの多様な文化的背景—それは階層の多様性も含んでいる—を持った人々が交流することによって、その多様な文化を取り込みながら形成されてきたものであり、それだからこそインドネシア語がインドネシア社会を統一する言語として認知されたのだと主張した。さらに将来、ジャワ語、特にジャワの民衆が日常的に使っているジャワ・ンゴコ（Jawa Ngoko, ジャワ平語）の影響を受けることを予測した。ジャワ・ンゴコがインドネシア語により多く取り入れられることによってインドネシア語をより多くの民衆が日常的に使い、その言葉を深く理解し感情移入することができるようになる。それによって、インドネシア語がインドネシア民衆をより広く包摂したコミュニケーションの言葉として、そしてインドネシア文化として、その地位をより確実に獲得していくことになると考えた⁴³。このジャワ語についてのサヌシ・パネの考えは以下の脚注でも記している通りであるが、その考えをジャワ中心主義的思考と捉えることもできる。しかし、バタック語を母語とするスマトラ出身者であるサヌシ・パネは、ジャワ島でそれまでの自身の人生の半分近くを過ごし、そこで得た実感に基づいた主張を行ったといえよう。

以上のインドネシア語の議論からサヌシ・パネは、原初主義的にインドネシア語をインドネシアの人々の所与の絆と理解しながらも、それは社会の変化によって変化していく、すなわちインドネシア

³⁹ Pane, Sanoesi “Rabindranath Tagore Sebagai Ahli Filsafat” *op. cit.*, pp. 81-83.

⁴⁰ Pane, Sanoesi “Basa Indonesia IV (Penoetoeop)” *Pemandangan*, 14 November 1941.

⁴¹ Pane, Sanoesi “Basa Indonesia II” *Pemandangan*, 12 November 1941.

⁴² サヌシ・パネの母語はバタック語であったが、インドネシア語に対するジャワ語の影響にも言及している。将来は、ジャワで使われているジャワ語、しかも宮廷の貴族が中心になって使っていたジャワ・クロモ（Jawa Kromo, ジャワ上級敬語）ではなくジャワの民衆が日常話しているジャワ・ンゴコがインドネシア語により大きな影響を与えるであろう、と予測している。しかも、インドネシア語はまだ十分基礎が固まっていないことを考えると、多くのジャワの民衆が話しているジャワ・ンゴコを当面ジャワの人々のコミュニケーション言語として使うべきであるとも提案した。ソロでの1941年10月のジャワ語協議会設立が統一言語としてのインドネシア語の地位を脅かすことになるのではないかの多くの意見に反論して、インドネシア語に大きな影響を与えているジャワ語が整備されることは、インドネシア語にも良い影響を与えると主張した。そして言語とは文化的社会的存在であるため、その整備協議会によってジャワ語の整備が進めば、ジャワ語のインドネシア語への影響が強まり、それが逆にジャワ語がインドネシア語に吸収されてしまう結果をもたらすようになるかもしれないと述べ、地方語の整備を行う委員会を擁護した（Pane, Sanoesi “Basa Indonesia dan Basa Djawa” *Pemandangan*, 12 November 1941）。

⁴³ Pane, Sanoesi “Basa Indonesia I, II, III, IV” *Pemandangan*, 11, 12, 13, 14 November 1941.

の文化的アイデンティティの形成について状況主義や社会的コミュニケーション理論により近い考えを1940年代初頭に持っていたことが理解できる。サヌシ・パネは、「インドネシア精神」の重要な要素の一つであるインドネシア語が形成されてきた歴史を重視したため、その「インドネシア精神」も歴史の経過とともに変化し、それが当時のインドネシアの領土と了解されていた東インドの人々をより広く包摂することを可能にすると考えた。しかも民衆が話すジャワ・ンゴコを重視していることから、サヌシ・パネがより民衆に近い立場で、すなわち民衆を包摂しようとする立場で言葉の問題を考えていたことが理解できる。インドネシアという時空において、民衆をも包摂した人々の営みの中で形成されてきたものがインドネシア語であり、それだからこそインドネシア語をインドネシア民族の統一語として位置づけ、また機能させるべきであると彼は考えた。アリシャバナがインドネシア語に対して持った関心は、西洋文化を摂取するための道具としてのインドネシア語の近代化であったことは大きく異なっていたといえよう⁴⁴。

このようにサヌシ・パネは、インドネシアの拠って立つ文化的アイデンティティである「インドネシア的なるもの」を当時オランダ領東インドという領域に住んでいる人々が歴史を共有することに求めた。1941年7月6～7日にタマン・シスワの夕べの懇親会でサヌシ・パネが話した内容は、まさに当時の彼のインドネシア文化に関する考えを簡潔に示している。インドネシアの文化としてペルシャ／タージマハール、インド／ボロブドゥール、村落／公民館 (balai)、西洋／スカイ・スクレーパー (sky scraper) の4つをあげた。西洋文化も含めて海外からの文化を重層的に受容することによってインドネシア文化が形成されてきたことを述べるとともに、インドネシアの村落の公民館を、民衆の全員一致の合意 (ムファカット)、社交、そして来客をもてなす「場」として取り上げたのである。インドネシアの文化は民衆の合意の上で形成されてきたのであり、そのムファカットがまたインドネシア文化の特徴であると彼は主張した⁴⁵。

バタヴィアで開催されたバタック部族会「ダリアン・ナ・トル (Dalian na Tolu)」における講演 (1941年10月1日と2日に『プマンダ (ン) ガン』に掲載された) でも、サヌシ・パネはアダットも芸術も社会や時代の要請によって変化していくものであり、文学は古典のみを読んでいてはだめである、と主張する。しかし同様に変化とは、歴史を「飛び越えて」なされるべきではないと説く。時代の要請によって人は個々人の判断で思慮分別をもって新しく生まれ変わっていくが、近年社会に蔓延している個人主義よりも、インドネシア社会で培われていた隣人や社会に対する愛情を大切にしなければならぬと、変革を認めながらも、伝統・歴史の大切さも訴えた。

永積昭は著書『インドネシア民族意識の形成』において、インドネシアの民族主義運動は当初、「インドネシア」という言葉を用いずに、「東インドの部分」の住民と表現したヨーロッパ人、欧亜混血児 (インドー) や中国人も含めた「領域志向」であったことを記している。そして1920年ごろを境に、いわゆるオランダ領東インドの「原住民」を指す「インドネシア人種」という概念が使われるようになった、すなわち「領域志向」から「人種志向」へ移行していった、と説明する⁴⁶。

しかし、以上で扱ったサヌシ・パネの論考は、1940年代初頭においても「インドネシア精神」の

⁴⁴ Alisjahbana, S. *Takdir Dari Perjuangan dan Pertumbuhan Bahasa Indonesia*, Djakarta: P. T. Pustaka Rakjat, 1957.

⁴⁵ Pane, Sanoesi "Empat Aliran Keboedajaan Indonesia" *Pemandangan*, 8 Juli 1941.

⁴⁶ 永積昭, 前掲書, pp. 185-190, p. 226.

探索が「領域志向」から「人種志向」に単純に移行していたわけではないことを示している。1941年10月10日の『プマンダ(ン)ガン』紙は、「グリンドにおけるナショナリズムとデモクラシー」と題したバタヴィアで開催された非公開のグリンドの第3回会議でサヌシ・パネの演説内容を紹介している。そこでサヌシ・パネは、次のように主張した。

ナショナリズムの問題は、自然、地理、そして文化の観点から理解することができる。自然や地理の違いによって、人々は生活様式の異なるグループに分かれることになった。……そして健全な人間や民族であり続けようと望むならば、新しい文化を形成するにあたって何世紀にもわたって形成されてきた古い文化を捨ててはならない。インドネシア民族 (bangsa) とは、おそらく「オランダ臣民」と現在よばれているすべての住民を包摂するものであり、……、そのさまざまな民族から構成されるデモクラシーに基づいた社会秩序をめざしていかなければならない⁴⁷。

グリンドは西欧型民主主義を標榜していたため、サヌシ・パネは演説の中では単にデモクラシーとしか表現していないが、それはインドネシアの村落に根付いていたムシャワラやムファカットを意味することは明らかである。また、以上の考えには、その領域に居住していない、そしてその領域の歴史や文化を共有していない、さらに東インドの人々によるデモクラシーを認めていないオランダ本国のオランダ人は含まれない。そこに、彼が東インドの自治を求める根拠が見いだせる。

ナショナリズムの理論を知っている者にとっては、この歴史の共有とデモクラシーによる未来の社会秩序構築を重視する主張が、フランスの歴史学者エルネスト・ルナン (Ernest Renan, 1823-1892年) によって1882年にソルボンヌで行われた講演「国民とは何か」に通じていることに気づくであろう。彼は、国民とは記憶の遺産の共有と、共に生活する願望 (le désir d'être ensemble) による精神的原理であり、どのような過去を選び取り、どのような未来像を描くのかは、「日々の人民投票」による国民の合意にゆだねる、と主張した⁴⁸。このルナンの主張は、インドネシア民族主義者によって、「インドネシア精神」、「インドネシア的なもの」を考え主張していくうえで、しばしば引用された。たとえば、「青年の誓い」が採択された1928年の会議の中で、ムハマッド・ヤミンは「民族とは共通に体験された歴史から、また共に生活しようとする願望から生まれる」とルナンの説を引用して、彼のインドネシア民族についての考えとした⁴⁹。さらに日本占領末期においてスカルノも、1945年6月1日の独立準備委員会で行った「パンチャシラの誕生」と題した講演でルナンの説に言及した⁵⁰。彼は、ルナンの主張は地政学上すでに古くなっており、「共に生活する願望」は、ジャワの民族主義やスマトラの民族主義を指すのではなく、インドネシアの民族主義として形成されなければならない、と主張した。「共に生活する願望」、それは換言すれば、共に生活する人々、すなわちインドネ

⁴⁷ "Nationalisme dan Demokrasi dalam Gerindo: Dail-Dail Pidato Toean Sanoesi Pane dalam Rapat Tertotoeop Gerindo di Kongresnja jang ke III di Djakarta" *Pemandangan*, 10 October 1941.

⁴⁸ ルナン, J. エルネスト「国民とは何か」(エルネスト・ルナン他著(鶴飼哲ほか訳)『国民とは何か』インスクリプト・河出書房新社, 1997年, pp. 41-64.) 原著は, *Qu'est-ce qu'une nation?*, 1882.

⁴⁹ 永積昭, 前掲書, pp. 258-259.

⁵⁰ スカルノ「パンチャシラの誕生」(日本インドネシア協会編・翻訳『スカルノ大統領演説集 インドネシア革命の歩み』日本インドネシア協会, 1965年, pp. 1-15.) 1945年6月1日の独立準備調査委員会での演説。

シア群島という実体を形づくる領土に住む全インドネシア民族によって「世界観」が共有されなければならない、と主張した。彼のいう「世界観」とは、インドネシア民族主義を意味した。しかもスカルノは、ルナンが提唱した「日々の人民投票」、すなわち西洋型議会制民主主義にも懐疑的であったと考えられる。インドネシア民族国家の一部の人々を利するのではなく、すべての人々の政治的経済的民主主義によって社会全体を繁栄に導く合議、すなわちムシャワラ、およびムファカットの方法を提案した。

サヌシ・パネに関しては、すでに述べたように、1941年の時点で、ルナンの名前こそ挙げなかったが、彼の「国民とは何か」で示された国民の概念と同様の考えを持っていた。しかしサヌシ・パネは、ルナンの説が植民主義者に利用される危険性を内包していることをもすで見抜いていた。そのことは、彼が日本占領期に執筆した記事から知ることができる。

それは、東インドの植民政策にかかわったオランダ人スヌック・ヒュルフローニエ (C. Snouck Hurgronje, 1857-1936年) がルナンの説を引用して、インドネシア民族はオランダ民族と一緒にしなければならないと著書『オランダとイスラーム』(1915)で主張したことに対するサヌシ・パネの反論に示される。すなわちサヌシ・パネは、「一つになろうとする願望は人々の心の中から生まれるもの (keinginan bersatu dari jiwa) でなければならない」と、1942年9月に日刊紙『アジア・ラヤ』で主張した⁵¹。その批判は、ルナンの「共に生活する願望」を、ヒュルフローニエが宗主国オランダと植民地インドネシアという非対等の関係にある人々に適用しようとしたところに向けられた。ルナンの説を植民支配者の立場で利用しようとしたヒュルフローニエに対する彼の批判は、東洋が西洋人の管理に委ねられているために必要となっていた行われたヒュルフローニエ等のイスラーム研究を後期オリエンタリズムとしてエドワード・サイード (Edward W. Said, 1953-2003年) が批判したことに通じる⁵²。また、日本占領期に発表された同論考は、当然日本に対する批判のアレゴリーでもあった。

以上、サヌシ・パネは、「文化論争」で主張したアダットや芸術に認められる「インドネシア的なもの」を、オランダとの協調路線のみが許された政治状況の中でグリンドの党员としての政治活動を通して鍛え、「インドネシア的なもの」をそこに住む人々が共有する歴史に求めるようになった。しかも、その「インドネシア的なもの」は、歴史の経過とともに鍛えられて変化するものであり、ゆえにそれが当時のインドネシアの領土と考えられていた東インドに住むすべての人々を包摂することを可能にするとの認識に到達していた。そして過去の歴史を共有し、その記憶に基づいて将来をムシャワラによって決めていくことに同意する人々であれば、人種のいかにかわらず東インドの一員として受け入れるべきであると考えた。一方、人間の自然感情の発露としての西洋芸術は否定はしなかったが、西洋の合理精神、そしてそれが生み出した帝国主義は東インドに住む人々の心からの願望による自治を否定するものと考えた。そこで次節では、彼を中心としたインドネシア知識人の当時の国際情勢、とくに日本を含めたアジアに対する認識について焦点を当てて考察したい。

⁵¹ Pane, Sanoesi "Islam dan Keboedayaan Asia Raya" *Asia Raya*, 17 September 2602 [皇紀] (1942).

⁵² サイード, E. W. (板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳) 『オリエンタリズム (下)』平凡社, 1993年, pp. 131-133. 原著の出版は1978年。

2. サヌシ・パネ等のアジア認識—「南進する日本」への対処方法を中心に—

サヌシ・パネはインドに滞在していた1930年に「日本は列強の間に重要な場所を確保したが、世界の政治や経済の構造に変化をもたらす能力を持っているようには見えない」と新聞の特電に記し、人類を先導して新しい社会の基礎を敷くことができるのはインドであると考えた⁵³。すなわち日本については、東洋にありながらも、西欧と同じ帝国主義国家と捉えていたことが分かる。この点、スカルノの捉え方に近かったといえる。その一方で、サヌシ・パネは、当時の国際情勢を民主主義対ファシズムの戦いと捉えたグリンドに参加した。当時、政治活動においてオランダとの政治路線のみが許された状況のなかで、日本とも協調路線をとっていたパリンドラではなく、グリンドを選択した。しかし、日本の南進が現実味を帯びてきた1941年においては、オランダと日本の両者をもとに帝国主義国と彼は捉えていたため、双方から等しく距離をおいて、インドネシアの自治、あるいは独立達成のために両国とどのような関係を切り結ぶべきか、考えを巡らせていたのではないかと推測する。

ここで本節では、1940年代初頭の『プマンダ（ン）ガン』紙に掲載されたインドネシア知識人の日本を含めたアジア地域に対する認識を、サヌシ・パネの論考を中心に検証したい。

その前に、本稿で扱うマレー語新聞『プマンダ（ン）ガン』の当時のオランダ領東インドの言論界で占めていた位置を示したい。

前節で触れたように、オランダ領東インドでは、オランダ語、それに続いて華人系マレー語新聞が最初に刊行され、「原住民」インドネシア人の資本によって彼らが刊行を手掛けたマレー語新聞の本格的な登場は、1930年代に入ってからであった。その主なものとしてはバタヴィアの『プマンダ（ン）ガン』、メダンの『プワルタ・デリ（Pewartu Deli, デリ報道）』、そしてスラバヤの『スアラ・ウムム（Suara Umum, 公論）』などが挙げられる。『プマンダ（ン）ガン』の発行部数は約7,000部で、パリンドラ系の『ブリタ・ウムム（Berita Umum, 公報）』とともに大新聞としての地位をバタヴィアで占めていた。

『プマンダ（ン）ガン』は、1933年にジャーナリストのサエルン（Saerun, 1920?-1962年）によって創刊され⁵⁴、『ブリタ・ウムム』や『クバ（ン）グナン』のような政党の機関紙ではなかった。サエルンはジョクジャカルタ（Yogyakarta）で生まれ、オランダ語で教育を受けた後、華人系マレー語新聞『シャンポ』と『ケンポ（Keng Po, 競報）』で記者の経験を積み、『プマンダ（ン）ガン』を創刊した。彼が記者をしていた時代の『シャンポ』や『ケンポ』は、インドネシア民族主義運動に共感する論陣を張っており、その刺激を受けてインドネシア人によるインドネシア民族主義を支援する新聞の創刊を考えたのであろう。同紙は、1933年4月に週刊新聞として創刊されたが、同年10月にはタシクマラヤ（Tasikmalaya）出身の実業家であり、また民族主義者のR. H. D. ジュナイディ（R. H. D. Djunaidi, 1895-1966年）の資金援助を得て、日刊紙となった。

『プマンダ（ン）ガン』には植民地政庁に逮捕され流刑となった国民党のスカルノやチプト・マンダングクスモ（Tjipto Mangunkusmo, 1885-1943年）、同じく流刑となった国民教育協会のモハマッ

⁵³ Mark, Eharu "Indonesian Nationalism and Wartime Asianism: Essays from the 'Culture Column' of Greater Asia, 1942" in *op. cit.*, p. 238.

⁵⁴ 増田与『インドネシア現代史』中央公論社、1971年、pp. 141-42.; 後藤乾一『火の海の墓標：ある〈アジア主義者〉の流転と帰結』時事通信社、1977年、pp. 89-90.

ド・ハッタ、対オランダ協調路線派であったパリンドラのモハマッド・フスニ・タムリンなど、幅広い多様な立場の民族主義者の論考が多数掲載された。一方国際情勢については、多くを海外の通信社の情報に依存した。それらは、イギリスのロイター (Reuter)、ドイツのトランスオーシャン (Transocean)、フランスのアヴァス (Havas)、アメリカの UP (United Press) や AP (Associated Press)、オランダ本国を拠点とした ANP (Netherlands national news agency) およびバタヴィア拠点のアネタ通信社 (Aneta news agency)、そして日本の同盟通信社であった。国際情報源はバランスの取れたものであったといえよう。

しかし、日本侵攻前夜の 1940 年代に入ると、オランダ植民地政庁によるインドネシアの民族主義運動、そして日本の帝国主義的行動に対する警戒がより一段と厳しさを増していた⁵⁵。1938 年に『プマンダ (ン) ガン』のサエルンは、日本軍陸軍参謀部の「インドネシア人による親日的傾向を持ったインドネシア語中央紙刊行計画」の遂行の一環として、同参謀本部の命を受けた東印度日報社副社長の久保辰二による買収の働きかけに応じようとしたとの嫌疑がかけられ、逮捕された。サエルンは 9 か月後には釈放されるが、久保らは国外退去処分を受けた⁵⁶。さらに、1940 年 5 月にオランダがドイツ・ナチスにわずか 5 日間で占領されたことを 5 月 16 日の紙面で報じたことが東インドの社会秩序の攪乱罪に問われ、翌日から 5 月 24 日まで発禁処分となった。そして、日本側が石油の確保を目指して 1940 年 9 月から進めていた第 2 次日蘭印会商が 1941 年 6 月に決裂し、日本の武力南進が現実味を帯びてくると、アジア情勢に関する論考も含めて日本の侵攻の可能性を考慮したものへと傾斜していく。しかも、インドネシア側の自治権要求をオランダ側がかたくなに拒否し続けると⁵⁷、『プマンダ (ン) ガン』の言論活動はそれまでのものと日本の侵攻の可能性を計算に入れたものとの微妙な均衡のうえに行われるようになった。そこで本論に入り、そのような状況の中で、サヌシ・パネらは日本を含めたアジア地域をどのように認識していたのか分析を試みたい。

1941 年 3 月 10 日から 2 日間にわたってサヌシ・パネは、「新聞資本⁵⁸」と題して、新聞経営がいかに困難なものであるかを論じた。新聞経営は、経営者の理想に従った編集方針を貫けるほど容易なものではなく、例えば、誰を主筆にするか、発行地域で同様の編集方針を取っている競合紙がないか、購買者はどれぐらいを期待できるか、などを考慮しなければならないことを述べた。そして創刊後数か月で消えていく日刊紙がいかに多いかと嘆いた。

この記事が掲載された理由が、3 月 15 日の「日本ひいき⁵⁹」と題した『プマンダ (ン) ガン』の無署名記事で明らかになる。同記事ではまず、華人系マレー語新聞の『ケンポ』の記事に対してサヌシ・パネが『クバ (ン) グナン』で次のような反論を行ったことを紹介した。『プマンダ (ン) ガン』のサエルンが同紙の創刊以前に日本総領事館で働いた経験があったことを理由に『ケンポ』が同紙を「日本ひいき」であると非難したことは疑問である。なぜならば、日本の機関で働くことを理由に、

⁵⁵ 当時のオランダが日本に強い警戒心を抱いていたことは、次の調査報告書から理解できる。“A Decade of Japanese Underground Activities in the Netherland East Indies,” Issued for the Netherland Government Information Bureau, London: His Majesty's Stationery Office, 1942.

⁵⁶ カナヘレ, ジョージ S., 前掲書, p. 13.

⁵⁷ 同書, p. 18.

⁵⁸ Pane, Sanoesi “Modal Koran” *Pemandangan*, 10, 11 Maart 1941.

⁵⁹ “Japanitis” *Pemandangan*, 15 Maart 1941.

日本の奴隷に成り下がった、あるいは売国奴となった、と決めつけることはできないからだ。そもそも新聞の発行には資本が必要であるが、その資本提供者が誰であろうと、新聞がその提供者の奴隷となるわけではなく、サエルンが創刊した『プマンダ（ン）ガン』が親日的であるという『ケンポ』の批判は的を射ていない、というものであった。そのサヌシ・パネの反論に同調して『プマンダ（ン）ガン』の同無署名記事は続けて、そのような批判を『ケンポ』が行っているのは、同紙の主筆が「Made in Japan」の靴下や下着を着用しているといったことを理由にされて日本ひいきの烙印を押される事態を招くことになるぞ！と締めくくり、『ケンポ』を牽制した。

この2つの記事は、様々な要素を考慮して新聞の編集が行われる以上、仮に将来『プマンダ（ン）ガン』が日本と何らかの関係を持つことになっても、それが日本に対する売国行為にはあたらないことを主張するために書かれたといえよう。当時は、第二次日蘭会商の交渉が暗礁に乗り上げていて、以前サエルンが日本側から同紙の買収を持ちかけられたように、日本から同様の働きかけを受ける可能性は否定できなかった。日本の資本提供を受けても、それを単純に売国行為とみなすべきでないし、また民族主義運動のために将来日本を利用することも十分ありうるのだ、との意見表明であったといえよう。

他方ではそれとは逆の対応、すなわち、ヨーロッパで第2次世界大戦の火ぶたが切られ、アジアでも日本の武力南進がインドネシアへの侵攻にまでおよぶことが現実味を帯びてくると、自分たちに自治を認める約束をしてくれればオランダと一緒に日本に対して戦おうという意見が『プマンダ（ン）ガン』にも続けて掲載された。それらは、以下の例に示されるように、必ずしもグリンドが主張する民主主義陣営とファシズム陣営の対決という構図の発想からでてきたものではない。

1941年4月1日付の「二つの旗の下で⁶⁰」と題した記事では、ロイター電としてその前日にラングーンでビルマ国旗の掲揚式が行われたことを伝えている。そして、ビルマのナショナリストは、今後ビルマとイギリスと二つの国旗の下で戦っていくが、もしインドネシアでもすでに何度もフォルクスラートで求めてきたように⁶¹我々の紅白旗が認められるのであれば、我々の海外の敵に対する闘争心はこれまで以上に強くなっていくであろう、と記す。そして、我々とオランダのイデオロギーと思考様式が異なることは明白であるが、我々が紅白旗を愛したからといってそれがオランダ王国の旗を憎むことにはならないのであるから、二つの旗のもとに人民が生活することはビルマに限られるべきでない、と結ぶ。日本はイギリスに対して一度は援蒋ルートの一つ、ビルマ側から中国に物資を送るルートの閉鎖を認めさせたが、アメリカが1941年3月成立のレンドリース法⁶²に基づいてイギリスなどへの軍事資金援助を開始すると、イギリスは日本との対決姿勢を鮮明にする。そして、自国への植民地ビルマの人々の協力を得るためにビルマ国旗を認めその掲揚式典を行った。「この二つの旗の下で」は、これに対する『プマンダ（ン）ガン』の見解を示した記事と解釈できよう。

また同様に、1935年にアメリカから10年後の独立を認められたフィリピン・コモンウェルスに関連したマリア・ウルフア（Maria Ulfa Santoso, 1911-1988年）の署名入り記事も掲載された。

⁶⁰ “Dibawah Doea Bendera” *Pemandangan*, 1 April 1941.

⁶¹ オランダに対してインドネシアの自治を求める要求の動きについては、次を参照のこと。カナヘレ、ジョージ S., 前掲書, pp. 17-18.

⁶² 1941年3月11日に、アメリカの防衛にとって重要とされた国（連合国）に対して、軍需物資を提供、貸与等する権限をアメリカの大統領に認めた法。

マリア・ウルファは、オランダのレイデン大学で法律を学んでいた時に、のちに西欧型社会主義に共感してインドネシア社会主義協議会のメンバーとなるシャフリルの思想に共鳴し、親交を深めた。その後東インドに戻り、ムハマディヤ系の中等学校で教職に就いた。1941年5月にフィリピン・コモンウェルスの学校を視察し、5月30日と6月23日の『プマンダ（ン）ガン』に寄稿した⁶³。ここでは、フィリピンの学校での国旗掲揚の儀式でフィリピンとアメリカの国旗両方が掲揚されていたことを報告し、将来オランダとの協調路線によってインドネシアが自治、そして独立を獲得した時の手本を暗示しようとしたと思われる。

さらに、パリンドラの中心人物でフォルクスラートの副議長を務めていたタムリンが、植民地政庁に親日派との嫌疑をかけられ家宅捜索を受けた5日後の1941年1月11日に急死したことについて—もちろんその死は当時新聞で大きく報道されたが—その死から4か月以上も経過した5月30日の同紙で「インドネシアのケソン、タムリンの死」という見出しで紹介された。マヌエル・ケソン（Manuel Queson, 1878–1944年）を大統領とするフィリピン・コモンウェルスが発足する前年の1934年、ケソンはオランダ領東インド政庁の招待を受けてアメリカへの病氣治療の途上にオランダ汽船を利用してインドネシアを訪問し、タムリンとも親交を結んだ⁶⁴。それ以来タムリンは、自らを「インドネシアのケソン」と称し、事務所にケソンの写真を掲げていた。そして翌年のケソンの大統領就任式には、パリンドラの同志スカルジョ・ウィルノプラノトとともに出席している⁶⁵。他方で、タムリンは1934年に日本の数名のジャーナリストとも会談し、その後親交を深めている。その一人は、前述の東印度日報社の久保辰二であった。日本はオランダの植民地であるインドネシアの砂糖を買わないでほしいとタムリンが久保に話すと、それが直ちにオランダ語新聞で取り上げられた。タムリンを親日派とする植民地政庁による嫌疑は次第に強まり、41年初めに政庁の尋問を受けた数日後に急死する運命が彼を待っていた。このタムリンについて「インドネシアのケソン、タムリンの死」と題した記事が『プマンダ（ン）ガン』に5月末に掲載されたことは、インドネシアの人々による自治要求を拒み続けるオランダ植民地政庁への批判を読者に対して喚起し、オランダへ自治承認の圧力をかけることを狙ったものと解釈できる。

このように、宗主国こそ異なるが、同じアジアの植民地であるビルマやフィリピン等の動きに細心の注意を払い、その中からオランダ植民地政庁との協調路線によって自治・独立を獲得するために役

⁶³ Ullfah Santoso, Mr. M. "Pendidikan dan Pergoeroean di Philippina" *Pemandangan*, 30 Mei, 23 Juni 1941. シャフリルが日本占領期に日本軍政から距離をおいていたのに対し、マリア・ウルファは日本軍によって組織された婦人会の活動にかかわった。

⁶⁴ Quirino, Carlos *Quezon: Paladin of Philippine Freedom*, Philippina Book Guild XVIII, 1971, pp. 268–269.

⁶⁵ Mona, *Matu Riwayat dan Perjuangan Mohd. Husni Thamrin*, Medan: Tagor, 1952, pp. 43–44. 初版は1941年にメダンで刊行。しかし、すでに一定の独立を与えられていたフィリピン側のケソンにとっては、インドネシアの民族主義運動を連帯意識によって積極的に支援する計画は持っていなかった、と考えられる。ケソンの評伝（Caballero, Beljun *The Rebirth of a Nation and Its Most Phenomenal Statesman*, Kube Grafiks, 2006）やタムリンの評伝（Hering, Bob (translated by Harsono Setejo) *M. H. Thamrin: Membangun Nasionalisme Indonesia*, Jakarta: Hasta Mitra, 2003）でも、その点は重要事項としては触れられていないし、タムリンの死に際しては、ケソンから弔電さえも送られた形跡はない（*Pemandangan*, 13 Januari 1941）。また後藤乾一「M. ハッタおよびM. ケソンの訪日に関する史的考察—1930年代日本・東南アジア関係の一段章—」（『アジアの伝統と近代化』早稲田大学社会科学研究所, 1990年）によると、フィリピン人は親米的心理を持ち、仲間のアジア人を恐れると同時に見下していた。

立つ情報を記事にして掲載し、オランダ側に訴える動きも 1941 年半ばまで存在した⁶⁶。しかもそれらの記事には、日本の武力南進の動きを圧力として、オランダの譲歩を引き出そうとする思惑が透けて見える。

オランダへの圧力として利用しようとした日本に対しては、国際情勢の中に位置づけて冷徹に分析し、西洋列強と違わぬ帝国主義国と認識していたことが、1941 年以降にサヌシ・パネなどが執筆した『プマンダ（ン）ガン』の記事から理解できる。

1941 年 7 月 12 日の『プマンダ（ン）ガン』に掲載された「日本の目的⁶⁷」と題したサヌシ・パネの論考では、日独伊三国軍事同盟が結ばれていたにもかかわらず、日本はドイツの対ソ攻撃を事前に知らされていなかったことを指摘したうえで、その後の日本の出方を冷静に予測している。ドイツがソ連に侵攻したことによって日本はソ連との戦いが容易になったし、その方が日本に南進されるよりもイギリスとアメリカにとっては好ましいことである。しかし、日中戦争で勝利するために、日本は蒋介石への物資輸送路、すなわち援蒋ルートの一つであるフランス領インドシナの南部にさらに侵攻する可能性も捨てきれない。その場合は、さらに南進して我々のところにも侵攻してくる可能性さえある、と分析する。そして、日本は数日のうちに判断を下し、その結果、誰が最強であり、この戦争がどれぐらい続くのか、推測することが可能になってくるかもしれない、と結んだ。アメリカとイギリス、ドイツと日本、そしてソ連、どちらかを正義や悪といった価値観で判断するのではなく、戦争をパワー・ポリティクスの論理で観察し、帝国主義国同士の争いとみているところは 1930 年代から変化がない。

事実 7 月 28 日に日本軍が南部仏印進駐に踏み出す直前の 7 月 25 日、サヌシ・パネはさらに論考を執筆した。そこでは、日本の同地への進駐は、その先のマラヤに至るさらなる南進を可能にすること、ヴィシー政権（Vichy Regime, 1940-1944 年）が日本に弱腰である理由、1940 年 11 月に始まったタイとフランスとの国境紛争に対して日本が調停に入り、その結果 1941 年 7 月に締結された東京条約に対してアメリカがどのような態度を示したかなどを記し、日本の松岡洋右外相の立場と動きは読み切れないが、とにかくインドネシアが戦火に巻き込まれないことを願うと締めくくった⁶⁸。

『プマンダ（ン）ガン』では、独立国家タイに関する記事も、同国が日本の傀儡国家である満州国を承認した見返りに、日本から借款を受けたことに言及して、8 月と 9 月に立て続けに登場する⁶⁹。ここでは、1940 年 5 月にドイツに敗れたフランスがヴィシー政権を樹立すると、タイはすかさず 1893 年のタイ仏戦争においてフランス側の圧力で同国に割譲したラオスとカンボジアの一部の返還を求め、その要求を仏印に進駐した日本の調停を介してフランスに同意させた経緯に言及する。それ以前のタイは、形の上では独立国であったが、主な輸出産業であるチーク、ゴム、スズ産業はヨーロッパ列強に握られ、金融はイギリスの手中にあり、また多くの中国人がコメの取引を握っていて半植民地のような状況であった。しかし、タイは全方位外交に非常に長けていたため、近代国家として海外か

⁶⁶ ただしフィリピンの自治・将来の独立が認められたのは、フィリピンの砂糖を中心とした農産物が無関税でアメリカに入ってくることに反対であったアメリカの農業団体の圧力等が背景にあったためである（中野聡『フィリピン独立問題史—独立法問題をめぐる米比関係史の研究（1929-46 年）—』龍溪書舎、1997 年、pp. 15-90）。

⁶⁷ Pane, Sanoesi "Toedjoean Djepang" *Pemandangan*, 12 Juli 1941.

⁶⁸ Pane, Sanoesi "Djepang di Indo-China" *Pemandangan*, 25 Juli 1941.

⁶⁹ *Pemandangan*, 5 August, 6 September 1941.

ら認められることに成功し、イギリス領マラヤやフランス領インドシナなどの領土問題にも積極的に利権の主張を行うこととなった、と説明した。そして、仏印に日本が進駐していることから、現在はインド、ビルマの植民地宗主国であるイギリスと日本の間にはさまれてどのような対応をしようか苦慮しており、選択を間違えると自国を戦場にしてしまうことになるだろう、との見解を表明した。そこには、イギリスとフランスの帝国主義諸国に対するタイのジオ・ポリティックスに基づいた行動が紹介され、しかもタイ自身の行動にも、元来ラオスやクメールの領地であったがフランスの植民地となっていた地域を自国に組み入れようとチャンスを狙う帝国主義的側面があったことを見逃していない。

またその翌月には、日清戦争に言及し、そもそも1894年7月から1895年3月にかけて日本と清国（中国）の間で行われた戦争とは、両強国による朝鮮半島をめぐる戦争であり、勝利した日本が朝鮮への権益を確保し、やがて併合して日本の植民地としたと紹介する。すなわち、日清戦争当時は中国も朝鮮の利権を得ようと帝国主義的行動をとっていたとの見方を提示した。

またサヌシ・パネは、帝国主義国家間の勢力争いを、社会・経済構造の視点によっても把握し、帝国主義国に対して植民地は経済的に従属しているとの認識も持っていた。前述した1941年10月10日の『プマンダ（ン）ガン』の「グリンドにおけるナショナリズムとデモクラシー」で紹介された彼の講演内容がそれを物語っている。そこで彼は、インドネシアの社会・経済の構造がアメリカやイギリス等のそれとは異なる点を指摘した。すなわち欧米列強は各々の自律的な資本主義経済活動に対して注意を払えばよいが、インドネシアの場合は、国外の資本主義の影響を受けて資本の流出が起こっていること、すなわち帝国主義諸国の経済の影響を受けている、と帝国主義諸国とその一つオランダの植民地であるインドネシアの違いを説明する。したがって、アメリカ等での労働運動にインドネシアの労働運動が追従することがグリンドの取るべき道ではない、と唱えた。それは、アメリカをオランダに置き換えることもできよう。

そして日本が12月8日未明にマレー半島について真珠湾を攻撃して「大東亜戦争」の火ぶたを切ると、『プマンダ（ン）ガン』には、植民地朝鮮に日本の慣習を強制していること、日中戦争で中国人を犬のように殺していることなどを例に挙げ、日本が掲げているスローガン「アジア民族のためのアジア」や日本を指導者として共存共栄の新秩序をアジアに構築するという「大東亜共栄圏」構想などの欺瞞性を指摘する記事が次々と掲載される⁷⁰。いよいよインドネシアにも戦火が及んでくると、戦時における食料の確保の方法や女性の心構えなどが記載された⁷¹。

その一方で、1941年12月27日から1月7日までの4回にわたって『プマンダ（ン）ガン』にサヌシ・パネの「歴史の中におけるマレー半島とマラッカ海峡⁷²」という論考が掲載された。同論考では、同地域における土着の諸王国の間での領土をめぐる戦い、その後のポルトガル、オランダ、イギリスなどの到来、それら西洋諸国の武力による土着王国の征服、などの歴史が描かれた。そして最後に日本について言及し、日本が上海を攻撃したことにより、イギリスが日本と闘うことになった。日

⁷⁰ “Asia Raja” *Pemandangan*, 5 Januari 1942.; “Penghidooan di Kolonie Japan” *Pemandangan*, 8 Januari 1942.; “Dengan Siapa Kita Berperang” *Pemandangan*, 20 Januari 1942.; “Kalau Djepang Datang…!” *Pemandangan*, 13 Februari 1942.

⁷¹ “Kaoem Iboe Indonesia dizaman Perang” *Pemandangan*, 11 February 1942.; “Soal Makanan dimasa Perang” *Pemandangan*, 26, 27, 28 February 1942.

⁷² Pane, Sanoesi “Semenandjoeng dan Selat Melaka dalam Sedjarah” *Pemandangan*, 27, 28 December 1941, 5, 7 Januari 1942.

本はクラ海峡を占領して、シンガポール、インドそしてスマトラにより短距離で到達することを目指すであろう、と分析する。そして、イギリス側にアメリカ、オランダ、中国が加わったため、同陣営と日本との戦力の差は歴然としているが、マラッカ海峡をめぐる戦争が勃発することは疑う余地がないとの判断を示した。その上で、戦争の行方の予測は難しく、とにかく戦争から自分たちの社会を守り、戦争被害を最小限にする努力をしなければならない、と読者に訴えた⁷³。

以上、『プマンダ（ン）ガン』に掲載されサヌシ・パネらが執筆した当時の国際情勢に関する記事の論調を見てきた。それらの論考からは、日本を東洋の文化や歴史を共有する国と理解するのではなく、西洋帝国主義国とアジアでの利権を争う同じ帝国主義国と認識されていたことが見てとれる。その認識は日本と比較するとより弱小国ではあったが、やはり独立国家であったタイに対しても適用された。一方、彼らは、植民地でありながら最終的には武力を用いずに宗主国アメリカから自治、そして10年後の独立の約束を勝ち取ったフィリピンに対して強い関心を持っていた。そして、フィリピンの事例に対する関心を喚起して、日本の南進の脅威を交渉材料として宗主国オランダから自治権を獲得しようとする主張が展開された。しかし、オランダが頑として自治・独立をインドネシアに対して認めようとしないうちにおいて、たとえ日本がオランダ領東インドに侵攻してきても、それは日本とオランダとの帝国主義国同士の戦いであるから、その戦争に無意味にインドネシアがかかわることは避けるべきであるとの主張がサヌシ・パネによって『プマンダ（ン）ガン』紙に投稿されていく。

1941年9月に、日本陸軍内に宣伝班が設置され、インドネシアに向けてインドネシアの民族歌のラジオ放送を開始する。インドネシアの知識人たちは、本節で明らかにしたように、日本を帝国主義国と認識していたが、断固としてインドネシアの自治を認めない植民地政庁との協調路線に諦念を強くし⁷⁴、日本の侵攻にどのように対処すべきか、逡巡することとなった。

そこで次節では、日本のジャワ侵攻をインドネシアの知識人たちがどのように受け止めようとしたのか、侵攻直後の『プマンダ（ン）ガン』紙上でサヌシ・パネの論考を中心に考察したい。

3. 日本占領直後の『プマンダ（ン）ガン』紙上におけるサヌシ・パネらの日本論

1942年3月1日未明、日本陸軍第16軍がジャワへ侵攻し、オランダ軍と戦闘状態に入り、3月8日にはオランダが降伏した。『プマンダ（ン）ガン』は、日本軍上陸直前の2月27日と28日に植民地政庁副総督ファン・モークによる東インドの住民は一致団結して日本と闘おうと呼びかけるラジオ声明の内容を掲載して休刊となった。3月9日に、『プマンダ（ン）ガン』は再刊された。検閲は、第16軍の宣伝班が行なったが、事前検閲までは実施されなかった。

再刊の2日前の7日に日本占領軍が布告第1号を公布し、「大日本軍ハ同族同祖タル東印度民衆ノ福祉増進ヲ図ルトモニ大東亜共同防衛ノ原則ニ準拠シ現地住民トノ共存共栄ヲ確保センコトヲ期シ差当り東印度ノ治安ヲ確立シ民衆ヲシテ速ヤカニ安居楽業セシメンガタメニ東印度占領地域内ニ軍政ヲ施行ス⁷⁵」と宣した。

⁷³ Pane, Sanoesi “Semoenanjoeng dan Selat Malaka dalam Sedjarah (IV)” *Pemandangan*, 7 Januari 1942.

⁷⁴ 注) 61を参照。一例として、1941年3月に、オランダの憲法の枠内での東インドの自治を求めたウィ・ホホ（Wiwoho）議決案が政庁によって拒否された。

⁷⁵ ジャワ新聞社『ジャワ年鑑 復刻版』ピブリオ、1973年、p. iii. 初版は1994年。

布告の日本語版の「同族同祖タル東印度民衆」は、インドネシア語版では“*rakyat Indonesia yang sebangsa dan seteroenan dengan bangsa Nippon*”と表記されている。日本語の「東印度民衆」のインドネシア語版をそのまま日本語に翻訳すると「インドネシア人民」となり、日本語版が「東印度」を用いているのに対し、インドネシア語版は「インドネシア」を用いている。これは、インドネシアの人々に日本がオランダに勝ち、すでに「東印度」という名称の地域は存在しないことを明確に示した日本側の意思表示であった。彼らの日本への支持を得るために用いたと思われる。

その一方でインドネシア人に対しては「人民 (*rakyat*)」や「住民」という表現を用い、日本人に対しては「民族 (*bangsa*)」を用いている⁷⁶。確かに当時の東インドには、「原住民」だけでなく、華僑や欧亜混血児(インドー)なども居住しており、インドネシア民族として一括りにすることは難しかったが、インドネシア「人民」は日本「民族」の一部に属する印象を与える⁷⁷。その印象が間違っていないことは、日本語の「同族同祖」という表現がそれまでに用いられてきた歴史に鑑みれば容易に推測できる。日本では江戸時代中期には日韓両民族は歴史的に親密な関係、しかも日本民族が支配的な立場にあると考える国学が存在した。それが明治時代の1890年に星野恒によって日鮮同祖論として理論づけられ、1919年の三・一運動を契機に日鮮両民族同源論が主張された。こうした論が、韓国併合や武断政治の限界から採用されるようになった朝鮮の日本への同化政策の根拠とされた経緯がある⁷⁸。したがって布告第1号の「同族同祖」は、ジャワを占領した日本軍がインドネシアで同化政策を行う意図があったことの証左となりうる⁷⁹。さらにオランダが降伏した3月8日には、秩序回復のために結社、集会を当面禁止する等の布告第2号が出され、日本が提唱する「大東亜共栄圏」構想の内実やインドネシアの独立承認に対してインドネシア知識人はより懐疑的になり、前節で明らかにした日本の国際的行動への彼らの不信感に拍車をかけた。

7日には、日本軍の中山寧人大佐がインドネシアの民族主義者に招待状を出して、そのうちの数名と会談を持ったことがきっかけとなって、同会談に出席した民族主義者の一人アビクスノ(*Abikusno Tjokrosukjoso*, 1897-1968年)が直後の3月10日にインドネシア臨時政府の樹立計画を発表した。しかし、その計画は14日に日本軍によって否定された⁸⁰。

その関係候補名簿に外務相として名前が上がっていたアフマッド・スバルジョ(*Ahmad Soebardjo*, 1896-1978年)は、スマランの日刊紙『マタハリ(*Matahari*, 太陽)』の特派員として1935-1936年

⁷⁶ 同書, p. iii.

⁷⁷ このインドネシア「民衆」は、オランダ王国の植民地時代は同地在住のオランダ人も含めてオランダ国女王の「臣民」とされていた。

⁷⁸ 小熊英二『単一民族神話の起源〈日本人自画像の系譜〉』新曜社, 1995, pp. 87-116.

⁷⁹ 「大東亜共栄圏」内の各国家及び各民族の位置づけについては、当初から統一した見解が示されていたわけではない。第2次近衛内閣の外相松岡洋右(1880-1946年)が1940年8月に同構想を初めて提唱した時には、域内諸民族を旧勢力の桎梏から解放し、それらの各民族を本来固有の姿に立ち返らしめ、共存共栄、隣保互助の実現を目指すものとされていた。しかし、日本人と異なる文化を持つアジアの諸民族を日本と同じように扱うことは不可能であるので、各民族の能力、文化および経済生活の程度、その他の諸般の条件に顧みてそれにふさわしい処遇を与えなければならないと政府によって考えられていた(鈴木麻雄「大東亜共栄圏の思想」『近代日本のアジア観』ミネルヴァ書房, 1998年, pp. 263-264)。その一方で、抗日運動が激しさを増す中国や朝鮮において、日本への同化政策をとることが彼らの協力を得ることにつながるなどの意見が強まり、同化政策や皇民化政策がとられていった。ジャワにおいては、「同族同祖論」以降は、「日本語を通じて日本の国民生活、日本精神および日本文化を理解会得させるとともに、主に日本語を大東亜共通語たらしめ共栄圏諸民族の思想を統一しその団結強化に資す」ことが了解されていた(ジャワ新聞社, 前掲書), p. 138.

⁸⁰ カナヘレ, ジョージ S., 前掲書, pp. 43-44.

に日本に滞在した経験があった。彼は、西スマトラ出身の民族主義者ユスフ・ハッサン・ジョヨディカルト (Yosef Hassan Djojodikarto, 1904-1964年) と連携して、武力南進を狙う日本の陸軍部隊によって1941年9月に設置された宣伝班のラジオ海外放送を利用して、反オランダ第五列活動を展開した。ユスフ・ハッサンは、植民地政庁による民族主義者弾圧を契機に海外へ脱出し、1933年に初訪日し、明治大学で学んだ。一度は日本から出国するが、1934年に再来日し、頭山満(1855-1944年)の凶南塾で半年間学んだ。1937年にジャワに戻り、再度東インドの官憲に逮捕されるが、その頃第五列活動を組織していたジャワ在住の日本人アジア主義者のグループと知り合い、1941年9月から行われた在留日本人の引き上げに便乗して日本へ潜行した。そして東京から、東インド在住のスバルジョ等と連携して反オランダ活動を展開した。同時期に創設された陸軍の宣伝班も利用して、ラジオ放送で東インドに向けて民族歌「インドネシア・ラヤ」などの宣伝放送を流すだけでなく、暗号を用いてスバルジョなどとラジオで連絡を取り合ったとされる⁸¹。1942年3月初めに日本軍がインドネシアに侵攻すると、スバルジョらが組織していた地下組織が表に現れて民族主義運動を展開した。しかし、その活動も4か月後には、日本軍の弾圧によって挫折することとなる⁸²。日本軍によるこれらの動きは、ジャワに侵攻する前の1941年11月20日に大本営政府連絡会議が決定した「南方占領地行政実施要領⁸³」の中で、さしあたり「原住民」の独立運動は過早に誘発させることを避ける方針が示されていたからであった。さらにこの決定は、1943年5月の「大東亜戦略指導大綱」へと引き継がれ、インドネシアは基本的には「帝国領土」の地位に置かれることとなる⁸⁴。

以上のように、日本侵攻直後には、日本軍が自らをアジアの解放者と宣伝したことに乗じて、インドネシアの独立を獲得しようとするインドネシア民族主義者の動きがみられた。その動きは直ちに日本占領軍によって抑え込まれるのであるが、その両者のせめぎあいの最中、すなわち『プマンダ(ン)ガン』再刊4日後の3月12日に、サヌシ・パネの「日本語とオーストロネシア語族⁸⁵」と題した論考が掲載された。同論考ではまず、日本語は本来ウラル・アルタイ語族に属するとの定説を紹介する。しかし、日本人の大半は、ジャワ人、スンダ人、バリ人、マドゥラ人、トラジャ人、ミナンカバウ人、バタック人などと同じマレー人の末裔であり、それにもかかわらず日本語とオーストロネシア語の関係に注意が向けられてこなかった理由が述べられた。そしてファン・ヒンローペン・ラッベルトン (Van Dirk Hinloopen Labberton, 1874-1961年) の論文を引用して⁸⁶、日本語とマレー語系の言語との

⁸¹ 西嶋重忠『増補 インドネシア独立革命 ハキム西嶋の証言』龍溪書舎、1981年、pp. 86-94.; 増田与「インドネシア人の日本観—ジョセフ・ハッサン論序説—」『社会科学討究』20巻2・3併合号、1975年3月、pp. 299-335。

⁸² Touwen-Bouwisma, Elly "The Indonesian Nationalists and the Japanese 'Liberation' of Indonesia: Visions and Reaction" *Journal of Southeast Asian Studies*, Vol. 27 No. 1, March 1996, Singapore University Press, pp. 1-18. カナヘレ, ジョージ S., 前掲書, p. 19. サヌシ・パネは、1944年10月にジャカルタで海軍武官の前田精少将(1898-1977年)が設立したインドネシア独立義正塾の講師の選択を一任されたアフマッド・スバルジョからインドネシア史の講義を任された。しかし日本侵攻時点で両者が親しい関係にあったのかどうかは現時点では不明である(スバルジョ, アフマッド(奥源造監訳)『インドネシア革命』龍溪書舎、1973年、pp. 122-123.)。

⁸³ 早稲田大学大隈記念社会科学研究所編『インドネシアにおける日本軍政の研究』紀伊國屋書店、1959年、pp. 531-532。

⁸⁴ 波多野澄雄『太平洋戦争とアジア外交』東京大学出版会、2011年、p. 178。

⁸⁵ Pane, Sanoesi "Bahasa Djepang dan Keloearga Bahasa Austronesia" *Pemandangan*, 12 March 1942. 同論稿は、1942年にサヌシ・パネが『プマンダ(ン)ガン』から出版した *Penoentoen ke Basa Nippon: Paramasastera dan Kamoos Indonesia-Nippon* oleh Sanoesi Pane (日本語への手引き)の序にも用いられた。

⁸⁶ Van Hinloopen Labberton, D. "Preliminary results of researches into the original relationship between the Nipponese and the Malay-Polynesian languages" *Journal of the Polynesian Society*, Vol. 33 No. 4, 1924.

共通点を列挙し、その両言語の共通性について日本とインドネシアの専門家が協力して研究を進めれば、両者の関係をより豊かなものにできよう主張した。

また翌日には「新時代」が掲載された。そこでサヌシ・パネは、

重要なこの瞬間に貢献し、インドネシア、アジア、そして世界において新しい基礎の上に新しい秩序を構築することを望むのならば、多少の変化はあろうが、基本は古くからの秩序—それは民族であり、正義であり、自然に根差した生活、献身、そしてクシャトリアである—をより美しいものにし、民族が民族を、人間が人間を搾取することのないものとするのである⁸⁷。

と記した。そして喜びと意志と精神を持って日本との友好関係、そして大アジアの基礎に依拠して新しい秩序と時代のために戦い、働こうと結んだ。

3月12日の論考では、日本語がマレー語族に類似し、日本人がマレー人の末裔であると主張することによって、その逆の日本人がマレー人の祖先ではないことを示した。日本軍による「同族同祖論」の主張に対抗した内容といえよう。

ここで、サヌシ・パネが引用した論文の著者ファン・ヒンローペン・ラッベルトンに注目しておきたい。彼は、バタヴィアの学校でジャワ語を教え、また神智学協会オランダ領東インド支部長を1912年から23年まで務めた人物である⁸⁸。その後日本の東京外国語学校(東京外国語大学の前身)の馬來語科の選択履修科目であったオランダ語の教師を1924年から25年にかけて務め⁸⁹、その日本滞在中に同論文は発表された⁹⁰。

神智学は、いわば西洋の合理主義の限界への認識を背景に1875年に設立された神智学協会の根幹に据えられた思想、実践であり、神の啓示を通して宇宙、自然、人間を統一体として理解することをめざし、民族、宗教の違いを超えて西洋と東洋の融合を提唱した。その思想はインドのヒンドゥー教の影響を受け、またその思想がインドのタゴールやインドネシアのタマン・シスワの創設者キ・ハジャル・デワントロに影響を与えたとされる⁹¹。その神智学協会のオランダ領東インドの支部長を務めてきたファン・ヒンローペン・ラッベルトンは、西洋の合理主義に懐疑を抱き、自国オランダの植民地政策には批判的な開明的な人物であった。サヌシ・パネは、このファン・ヒンローペン・ラッベルトンのジャワ滞在最后の数年間、師範学校の生徒として同じバタヴィアに居住していた。彼が、その時にファン・ヒンローペン・ラッベルトンと直接面識があったかどうかは不明であるが、その後インドに留学したことに鑑みると、東インドでの神智学の活動を知っていた可能性は高い。神智学者の立場からオランダ植民地政策、そして西洋の合理精神を批判していたファン・ヒンローペン・ラッベルトンの論文をあえて引用したことは、サヌシ・パネが表面上は日本が主張する「同族同祖論」を支

⁸⁷ Pane, Sanoesi "Zaman Baroe" *Pemandangan*, 13 Maart 1942.

⁸⁸ 土屋健治『インドネシア民族主義研究』創文社、1982年、p. 93; De Tollnaere, Herman "Indian Thought in the Dutch Indies: The Theosophical Society" *The Online Newsletter of the International Institute for Asian Studies*, October 2000 (<http://www.iiasn.nl/iiasn/23/theme/23T2.html>) (2016年2月10日閲覧)

⁸⁹ 『東京外国語大学史』p. 1908, p. 1911. (<http://www.tufs.ac.jp/common/archives/history.html>) (2016年1月22日閲覧)

⁹⁰ ファン・ヒンローペン・ラッベルトンが所属していた馬來語科では、1919年から24年まで上原訓蔵がマレー語を教えた。彼は、日本占領期にジャワに軍属として滞在し、日本軍による文化工作にかかわることとなる。

⁹¹ De Tollnaere, Herman, *op. cit.*

持したように見せかけて、実際はファン・ヒンローベン・ラッペルトンが提唱していた自然と人間を一体として理解する精神世界の重要性を読者に思い起こさせる意図を隠し持っていたと考える。マレー語族であることを共通項とした東洋の同胞である日本とインドネシアが構築する「大東亜共栄圏」の世界とは、西欧の合理主義が生み出した帝国主義国家が植民地の拡大をめぐる勢力争いを繰り広げる世界ではなく、自然と人間の調和のとれた社会こそを追求すべきであると主張したかったと考えられる。

そして翌日3月13日の論考「新時代」においてサヌシ・パネは、民族が民族を、人間が人間を搾取することのない大アジアの基礎に依拠して、アジアにおいてだけでなく世界において新秩序を作ろうと主張した。日本占領直後に発表されたサヌシ・パネのこの2本の論考は、日本を指導者として新秩序の構築をめざす「大東亜共栄圏」構想とは彼が明らかに一線を画していたことを示すものといえよう。そこには、前節で明らかにしたように、帝国主義国家として日本を認識していたサヌシ・パネが、日本の正体を見抜いて、あらかじめ日本を牽制しようとした意図が汲み取れる⁹²。

さて、サヌシ・パネの「新しい時代」の論考が掲載された1942年3月13日の『プマンダ(ン)ガン』には、1928年の第2回インドネシア青年会議で民族歌として採択された「インドネシア・ラヤ」の歌詞が掲載された。またその前日には、インドネシアと日本の国旗がともに紅白であり、両者は協力していこうという詩も掲載された。この行為が、さしあたり「原住民」の独立運動は過早に誘発させることを避ける方針に抵触したものとして、宣伝班の検閲において問題視された。3月15日は日曜日のため新聞は休刊であったが、16日の発行から宣伝班検閲部の事前許可を取ることが求められ、その日はその手続きのために新聞が市場に出回るのが遅れた⁹³。この事件は、サヌシ・パネも含めたジャワ在住のインドネシア人ジャーナリストが、日本が本当にインドネシアに対し独立を与えるのかどうか懐いていた疑心を一層強いものにした。そして、サヌシ・パネも参加した3月27日にジャカルタの芸術会館で開かれたインドネシア人文化人と宣伝班との初会合で、徴用作家で宣伝班のリーダー格であった富沢有為男がインドネシアの独立は当分認められないとの講演を行い、参加したインドネシア文化人の失望は決定的となった⁹⁴。その場に居合わせたタクディル・アリシャバナは、『プジャンガ・バル』の廃刊を決める。

ただし、日本軍宣伝班による検閲は、インドネシアの民族主義運動や独立に関する記事については厳しく取り締まったが、「大東亜共栄圏」をまとめる文化については占領軍、そして検閲を担当した宣伝班内部で共有された認識が必ずしもなく、占領軍内は混乱していた。例えば、検閲を担当していた宣伝班が刊行した『アジア・ラヤ』紙に対してさえ、憲兵隊が頻繁にクレームをつけた。その混乱に乗じて、日本を牽制する記事が『プマンダ(ン)ガン』に掲載された。

日本占領期後半からエル・ハキム(El Hakim)というペン・ネームで戯曲の執筆活動を行う医師アブ・ハニファ(Abu Hanifah, 1906-1980年)は、『プマンダ(ン)ガン』の2602[皇紀](1942)年5月18日から3日間にわたって、「東洋哲学の精神を考える」と題した論考を執筆しているが、

⁹² グリンドにおいてサヌシ・パネの同僚であったアミル・シャリフディンは、反ファシズムの立場から、オランダの資金を得て連合国側に立って枢軸国側に抵抗する方針をとった。そして、東部ジャワを主な活動地点として反日の地下運動を展開し、1943年初めに日本軍に逮捕された。のちに、スカルノの嘆願で釈放された。(Kahin, George Mcturman, *op. cit.*, p. 112.)

⁹³ *Pemandangan*, 16 March 1942.

⁹⁴ 中谷義男「故スカルノ大統領と私(1)」『インドネシア文学』No. 3, 1972年, p. 68.

そこで紹介された東洋の哲学・思想は、タゴールや仏教、そして儒教であった。すなわち、東洋の知識人は西洋教育を受けた結果、人間性に根差した東洋哲学を忘れつつあることを危惧し、東洋の思想の中でも特に西洋の思想に大きな影響を与えたものとして道教と儒教を紹介した⁹⁵。日本の神道については、列挙された東洋の思想の中に含めたものの、その内容には全く触れなかった。5月27日に掲載された論考「東洋と西洋」では、西洋の帝国主義精神は、大日本と中国が手を組んでアジア民族が一致団結すれば恐れるに足らない、と記し⁹⁶、日本の指導的立場を認めていなかっただけでなく、日中戦争の只中にあった両国の立場を考えれば、それは日本の「大東亜共栄圏構想」に対する皮肉以外の何ものでもなかった。

日本占領初期において、すでに日本の本音を理解していたインドネシアの文化人たちは、日本が建前として掲げ宣伝した「大東亜共栄圏」構想について、自分たちの期待を表明して、日本側を牽制していた。また、日本とどのような関係を結ぶことによってインドネシアの独立を達成することができるのか、日本の出方を注視していた。

おわりに

「はじめに」で述べたように、サヌシ・パネを中心とした知識人は、日本侵攻前夜において、それまでインドネシアを形成してきた歴史を共有する住民であればインドー等も含めて民族の違いを乗り越えて、土地の伝統に根差した民主主義に基づくインドネシア国家の建設をめざしていた。そのような姿勢の背景には、オランダ植民地政庁の民族主義運動への弾圧のもと、民族主義運動は穏健な形を取らざるを得ない政治状況があった。流刑地にあったスカルノがオランダへの対決姿勢を鮮明にしていたのに対し、現実の政治の中に身を置いていたサヌシ・パネたちは、オランダへの協調路線の中で、いかにオランダから譲歩を引き出すかという方法が最も現実的なものだったからといえよう。

しかし、それだけに起因していたわけではないことも本稿で明らかになった。オランダ領東インドを領土としてそこに住む人々をインドネシア民族として一つにまとめるためには、インドーや華僑も含めた多様な背景と文化を持ったインドネシア各地の諸民族をまとめる統一原理が重要であった。サヌシ・パネなどの文学者、そして外島出身者としての経歴を持つ人々は、その多様な民族構成により敏感で、それらの多様な諸民族をインドネシアの人々として統一するために拠って立つ「インドネシア的なるもの」を政治的に考えるよりも、文化的視点で考察することの重要性を認識し、それを東インドに住む人々によって共有されてきた自然環境や歴史的に育まれてきた文化や芸術に求めた。インドのタゴールの影響を強く受けていたサヌシ・パネらは、自然と人間の調和、さらにそれを重視する東洋に位置するインドネシアが育んできた文化や芸術に対しての西洋の文化の影響も認めて、東洋と西洋の調和も重視した。

一方、当時の国際情勢を西洋の合理主義精神が生んだ帝国主義国家間、それもチャンスがあれば弱小国も加わった勢力争いと認識していた。サヌシ・パネたちは、そのような際限のない争いに巻き込まれるよりは、それらの列強と協調路線を取ることで譲歩を引き出すほうが、インドネシアの将来にとって望ましいと認識していた様子が見て取れる。

⁹⁵ Hanifah, Dt. M. E. Abu "Meninjau Semangat Filsafah Timoer" *Pemandangan*, 18, 19, 20 Mei 2602 [皇紀] (1942).

⁹⁶ Hanifah, Dt. M. E. Abu "Timoer dan Barat" *Pemandangan*, 27 Mei 2602 [皇紀] (1942).

そこに侵攻してきた日本が提唱した「大東亜共栄圏」が、その圏域に住む人々がその地域で育まれてきた文化そして歴史を共有し、その人々がムシャワラやムファカットによって「大東亜共栄圏」の社会秩序を形成することとなれば、サヌシ・パネらは日本に「心から」協力したであろう。しかし、日本が「大東亜共栄圏」で行おうとしたことは、日本を指導者として日本民族へ人々を同化させることであった。そのため、サヌシ・パネらは、日本に対しても、協調路線を装いつつ彼らからいかに譲歩が引き出すか、侵攻前夜と同様に対処しようとしていたといえよう。

一次資料

新聞

- ・ Asia Raya
- ・ Pemandangan
- ・ Pembangunan

雑誌

- ・ Poedjanga Baroe

書籍

- ・ ジャワ新聞社『ジャワ年鑑 復刻版』ピブリオ、1973年。
- ・ 日本インドネシア協会編・翻訳『スカルノ大統領演説集 インドネシア革命の歩み』日本インドネシア協会、1965年。
- ・ Pane, Sanoesi *Penoentoen ke Basa Nippon: Paramasastera dan kamoes Indonesia-Nippon oleh Sanoesi Pane*, Pemandangan, 1942.

参考文献

- 小熊英二『単一民族神話の起源〈日本人自画像の系譜〉』新曜社、1995年。
- カナヘレ、ジョージ S. (後藤乾一、近藤正臣、白石愛子訳)『日本軍政とインドネシア独立』鳳出版、1977年。
- 後藤乾一『火の海の墓標：ある〈アジア主義者〉の流転と帰結』時事通信社、1977年。
- 『昭和期日本とインドネシア』勁草書房、1986年。
- 「M. ハッタおよび M. ケソンの訪日に関する史的考察—1930年代日本・東南アジア関係の一段章—」(『アジアの伝統と近代化』早稲田大学社会科学研究所、1990年)
- タゴール、ラビンドラナート (高良とみ訳)「東洋文化と日本の使命」『タゴール著作集第8巻 人生論・社会論集』第三文明社、1981年。
- 土屋健治「スカルノの研究—パンチャ・シラ成立の過程—」『東南アジア研究』8巻4号、1971年3月。
- 「スカルノの第二次世界大戦論」『東南アジア研究』10巻2号、1972年9月。
- 「ジャワ知識人の西欧認識をめぐる諸問題 (1913年～1922年)」『東南アジア研究』15巻4号、1978年3月。
- 『インドネシア民族主義研究』創文社、1982年。
- 『インドネシア—思想の系譜』勁草書房、1994年。
- サイド、E. W. (板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳)『オリエンタリズム』平凡社、1993年。原著の出版は1978年。
- 齊藤鎮男『私の軍政記：インドネシア独立前夜』日本インドネシア協会、1977年。
- 鈴木麻雄「大東亜共栄圏の思想」『近代日本のアジア観』ミネルヴァ書房、1998年。
- スバルジョ、アフマッド (奥源造監訳)『インドネシア革命』龍溪書舎、1973年。
- 『東京外国語大学史』(<http://www.tufs.ac.jp/common/archives/history.html>)
- 永積昭『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会、1980年。
- 中野聡『フィリピン独立問題史—独立法問題をめぐる米比関係史の研究 (1929-46年)—』龍溪書舎、1997年。
- 中谷義男「故スカルノ大統領と私 (1)」『インドネシア文学』No. 3, 1972年。
- 西嶋重忠『増補 インドネシア独立革命 ハキム西嶋の証言』龍溪書舎、1981年。
- 波多野澄雄『太平洋戦争とアジア外交』東京大学出版会、2011年。
- 姫本由美子「日本占領下インドネシアで語られた『大東亜共栄圏文化』の理念：日刊紙『アジア・ラヤ』上の日本徴用文化人と現地作家の論説を中心に」『21世紀海域学の創成—南洋から南シナ海・インド洋・太平洋の現代的ビジョンへ』立教大学アジア地域研究所、2015年7月。(<https://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/CAAS/kaiiki/2/55.pdf>)

- 増田与『インドネシア現代史』中央公論社, 1971年。
 ——「インドネシア人の日本観—ジョセフ・ハッサン論序説—」『社会科学討究』20巻2・3併合号, 1975年3月。
- 山本信人「インドネシアのナショナリズム—ムラユ語・出版市場・政治」(池端雪浦編『植民地抵抗運動とナショナリズムの展開—19世紀末〜1930年代』岩波講座 東南アジア史 第8巻, 2002年。
- 山本春樹「『インドネシア』の文化論的意味—1930年代の文化論争を通して—」『南方文化』8号, 1981年。
- ルナン, J. エルネスト「国民とは何か」(エルネスト・ルナン他著(鴉飼哲ほか訳)『国民とは何か』インスクリプト・河出書房新社, 1997年)原著は, *Qu'est-ce qu'une nation?*, 1882。
- 早稲田大学大隈記念社会科学研究所編『インドネシアにおける日本軍政の研究』紀伊国屋書店, 1959年。
- “A Decade of Japanese Underground Activities in the Netherland East Indies,” Issued for the Netherland Government Information Bureau, London: His Majesty's Stationery Officer, 1942.
- Aeusrivongse, Nidhi “Fiction as History: A Study of Pre-War Indonesian Novels (1929–1942)” Ph. D. dissertation, the University of Michigan, 1976.
- Alisjahbana, S. *Takdir Dari Perjuangan dan Pertumbuhan Bahasa Indonesia*, Djakarta: P. T. Pustaka Rakjat, 1957.
- Arsip Nasional Indonesia edit. *Di Bawah Pendudukan Jepang: Kenangan Empat Puluh Dua Orang Yang Mengalaminya*, Jakarta: Arsip Nasional Republik Indonesia, 1988. (インドネシア国立文書館編著(倉沢愛子・北野正徳訳『ふたつの紅白旗: インドネシア人が語る日本占領時代』木犀社, 1996年。)
- Bodden, Michael H. “Utopia and the Shadow of Nationalism: The Plays of Sanoesi Pane 1928–1940” *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 153, no. 3, 1997, Leiden: Brill, pp. 332–355.
- Bourchier, David *Illiberal Democracy in Indonesia: The Ideology of the Family State*, London and New York: Routledge, 2015.
- Caballero, Beljun *The Rebirth of a Nation and Its Most Phenomenal Statesman*, Kube Grafiks, 2006.
- De Tollnaere, Herman “Indian Thought in the Dutch Indies: The Theosophical Society” The Online Newsletter of the International Institute for Asian Studies, October 2000. (<http://www.iias.nl/iiasnl/23/theme/23T2.html>)
- Freidus, Alberta Joy *Sumatran Contributions to the Development of Indonesian Literature: 1920–1942*, Asian Studies Program, University of Hawaii, the University Press of Hawaii, 1977.
- Henk Schulte Nordholt, Bambang Purwanto, dan Ratna Saptari edit. *Perspektif Baru Penulisan Sejarah Indonesia*, Jakarta: Yayasan Obor Indonesia, KITLV-Jakarta, dan Pustaka Larasan, 2013.
- Hering, Bob (translated by Harsono Setejo) *M. H. Thamrin: Membangun Nasionalisme Indonesia*, Jakarta: Hasta Mitra, 2003.
- Jassin, H. B. *Kesusastraan Indonesia Modern Dalam Kritik dan Esei I (Tjetakan Ke-Empat)*, Jakarta: P. T. Gunung Agung, 1966.
- Kahin, George McTurnan *Nationalism and Revolution in Indonesia*, Southeast Program Publications, Ithaca, New York: Southeast Asian Program, Cornell University, 2003.
- Mark, Ehorn “Indonesian Nationalism and Wartime Asianism: Essays from the ‘Culture Column’ of Greater Asia, 1942” in Sven Saaler and Christopher W. A. Szpilman edit. *Pan-Asianism: A Documentary History Vol. 2: 1920–Present*, Lamham: Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 2011.
- Mona, Matu *Riwajat dan Perjuangan Mohd. Husni Thamrin*, Medan: Tagor, 1952.
- Nasution, J. U. *Pudjangga Sanoesi Pane*, Djakarta: P. T. Gunung Agung, 1963.
- Quirino, Carlos *Quezon: Paladin of Philippine Freedom*, Philippina Book Guild XVIII, 1971.
- Redaksi KPG (Kepustakaan Populer Gramedia) edit. *Seri Buku Tempo Bapak Bangsa Muhammad Yamin: Penggagas Indonesia yang Dihujat dan Dipuji*, Jakarta: KPG, 2015.
- Reid, Anthony “The Nationalist Quest for an Indonesian Past” in A. Reid and D. Marr edit. *Perceptions of the Past in Southeast Asia*, Singapore: Published for the Asian Studies Association of Australia by Heineman Educational Books (Asia), 1979.
- Smith, Edward C. *Sejarah Pemgreidelan Pers di Indonesia*, Jakarta: Grafiti Pers, 1983.
- Suryadinata, Leo *The Pre-World War II Peranakan Chinese Press of Java: A Preliminary Survey*, Athens, Ohio: Ohio University Center for International Studies, Southeast Asia Program, 1971.
- Tagore, Rabindranath “The Nobel Prize Acceptance Speech” in Sisir Kumar Das edit. *The English Writing of Rabindranath Tagore: A Miscellany, Vol. III*, New Delhi: Sahitya Akademi, 1996.
- Touwen-Bouwsma, Elly “The Indonesian Nationalists and the Japanese ‘Liberation’ of Indonesia: Visions and Reaction” *Journal of Southeast Asian Studies*, Vol. 27 No. 1, March 1996, Singapore University Press.
- Van Hinloopen Labberton, D. “Preliminary results of researches into the original relationship between the Nipponese and the Malay-Polynesian languages” *Journal of the Polynesian Society*, Vol. 33 No. 4, 1924.
- Yoesoef, M. “Drama Di Masa Pendudukan Jepang (1942–1945): Sebuah Catatan Tentang Manusia Indonesia di Zaman Perang” *Makara, Sosial Humaniora*, Vol. 14 No. 1, Juli 2010.